毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治二十九年十月廿五日發兌

第八拾八號

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番
發行兼印刷人 吉崎四吉
編輯人 金子佐平
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿九年十月廿五日發行
家庭雜誌第八拾八號

目録



家庭雑誌第八拾八號

（明治廿九年十月廿五日發兌）

社説

改良下宿屋

何れの都會にても然ることながら、特に東京の如きは、獨身若くは永住にあらざるが爲め、或は輕便廉價の生活を必要とするが爲め、他人の家に寄寓し、又は多人數共宿せざるべからざるもの頗る多し。

現に書生のみにても幾萬を以て數ふる程にして、之が需用を充たさんが爲には、市中到る所に下宿屋の看板を門側に掲げつゝある家を見出すにあらずや。

然るに多くの下宿屋は、恰も多日滯留の旅客を泊したると一般にして、諧和なく、規律なく、便宜具はらず。中には間接に遊怠放蕩の媒をなし、陋俗淫風の發暢を助くるものさへこれあるを見る也。

特に現今の下宿屋に於て最も缺如する所は、其單に獨身者を宿せしむべくして、殆んど全く一家族を寓居せしむるに堪へざること是也。

都會の次第に繁榮に向ふと共に、家賃の騰貴すること言ふまでもなく、多額の收入ある家族にあらざるよりは、都會の中央に居ること漸く難く、都會の擴張するに從ひ、次第に遠距離の所に去て其居を卜せざるべからざるに至るべし。然るに遠く場末に在り其職業に差支へなきは、勿論それにて不可なることあらざるべしと雖、都會の中心に其職業を有するものは、遠く通勤する爲に時間の徒消を免れざるのみならず、車馬の便を假らば其家政に少なからざる影響を及ぼすべし。去り迚都會の中心に其居を卜せんには則ち高價の借家料を拂はざるべからず。此の不便を避くるの道は、唯下宿屋を改良して、獨り一個單身者を容るゝのみならず、

幷せて幾多の家族を容るべからしむるに在るのみ。

近頃聞く、借家科の餘りに騰貴したるが爲め、寧ろ自己の家屋を有せんと欲するもの漸く多きに至りたるに乘じ、一種の建築會社を設け、依賴者の爲に家屋を造り、十年十五年の年賦によりて之を全く其所有に歸せしむべく營業し始めたるものありと。是れ甚だ便宜なる方法にして、彼我相利すること少なからざるべしと雖、吾人は更に自己の家屋を有せんと欲するに及ばざるものゝ爲に、幾多の家族を容るべき大下宿屋を設くるの、彼我相益すること一層大なるものあるべきを信ず。

若し此くの如くならんには、復た中央街衢に矮陋なる窮民屋を存するの必要なく、大に都會の靚觀を添ふべきのみならず、公共衛生上にも大なる便宜を得、而も學生獨身者は勿論、多額ならざる俸給に衣食する人もさては勞働者も、依然中央街衢に居住するの利益を失はざるべし。

而して此くの如きの大下宿屋に於て、缺くべからざる構造は大室小室各一家たるを得べきしまりあり結搆あるものなるべきこと第一也。獨身者若くは小家族にして小室を以て足れりとするものは、小室を擇ぶべく、大家族は大室を擇ぶべく、或は二室三室をも擇ぶを得べし。

第二は一種の俱樂部を設け、庭園を有し、一大室中共同の遊息所を置きて新聞雜誌等を備へつけ、自在に觀覽するを得べからしめ、又相親睦交遊するを得べからしむべし。殊に矯風主義を持して、常に其共同家族を清く健全なる樂みに導くべく如きは、最も望ましき所たり。

次は其大下宿屋の住民は、勿論共同の食堂を有し共同の僕婢を有すべきと同時に、各自の便宜によりて共同庖厨の一部に於て自炊するを得べからしめ、僕婢の如

き或る一二の事にのみ雇ひ若くは全く雇はざるを得るものならしめざるべからず。これ各自の經濟上に其便宜とする所多樣あるべければ也。

上州伊香保の如き温泉地に到りたるものは知らん。此くの如きの温泉地に在りては、普通下宿屋の如くするもの丶外、竈を假して自炊せしむるものあり、或は婢僕中炊爨を請負ふもあるにあらずや。此種の方法をして自在に發達せしめば、極めて經濟的なる廉價生活をなさしめ得べく、而も極めて便宜多き生活を遂げしむるに足るべし。

之を要するに此くの如き大下宿屋の設置は、是迄の下宿住民たる書生獨身者等の爲には、其の生活を多趣味ならしめ便宜ならしめ、其新住民たる下宿住居の家族の爲には、極めて廉價輕便にして、而も中央街衢居住の利を得せしむべく、市街のみへよりも、公共の衞生上よりも、將た營業者の利益上よりも、其便益一にして足らざる也。又世の濟民救世を以て自ら任ずるものの爲には、其主義擴張上最良便宜の一たらしむるを得べし。

吾人は之が營業者に向て此の大下宿屋の設置を望むのみならず、世の矯風家に向て其主義擴張の便宜上亦之が建設の好事業なるを勸む。地方人民中其愛兒女の遊學を望むと共に、信用すべきの依托者なきに苦むは、比々皆然るを知らずや。

大閤秀吉人を誡めの歌

寄相能者。正直や、能書、物書、學文者、貴人年寄りを見る人

藥に成る者。朝起や、不婬、少食、温湯、か丶り師、親、鹽茶に鹽酒ぞかし

毒に成る者。酩酊や、晝寢、飽滿、遊三すぎ、親には不孝、主には緩怠

人に賞らる丶者。賴母しく、會釋よくして、氣さ丶よく、いんきんにして本式ぞよく

人に惡まる丶者。隨意にして物知顏の差出口追從ありて自慢する人

人に成る者。算用や有力商賣世上たて公義才覺身をかせぐ人
人に不成者。老、無力、病者、逃懶氣さヽだてしつかに、思案油斷
不氣根
右歌さしてはさまで珍重するに足られど其　誠の意充分な
るはすてかたしさいふべし

科學

石油の話（上）

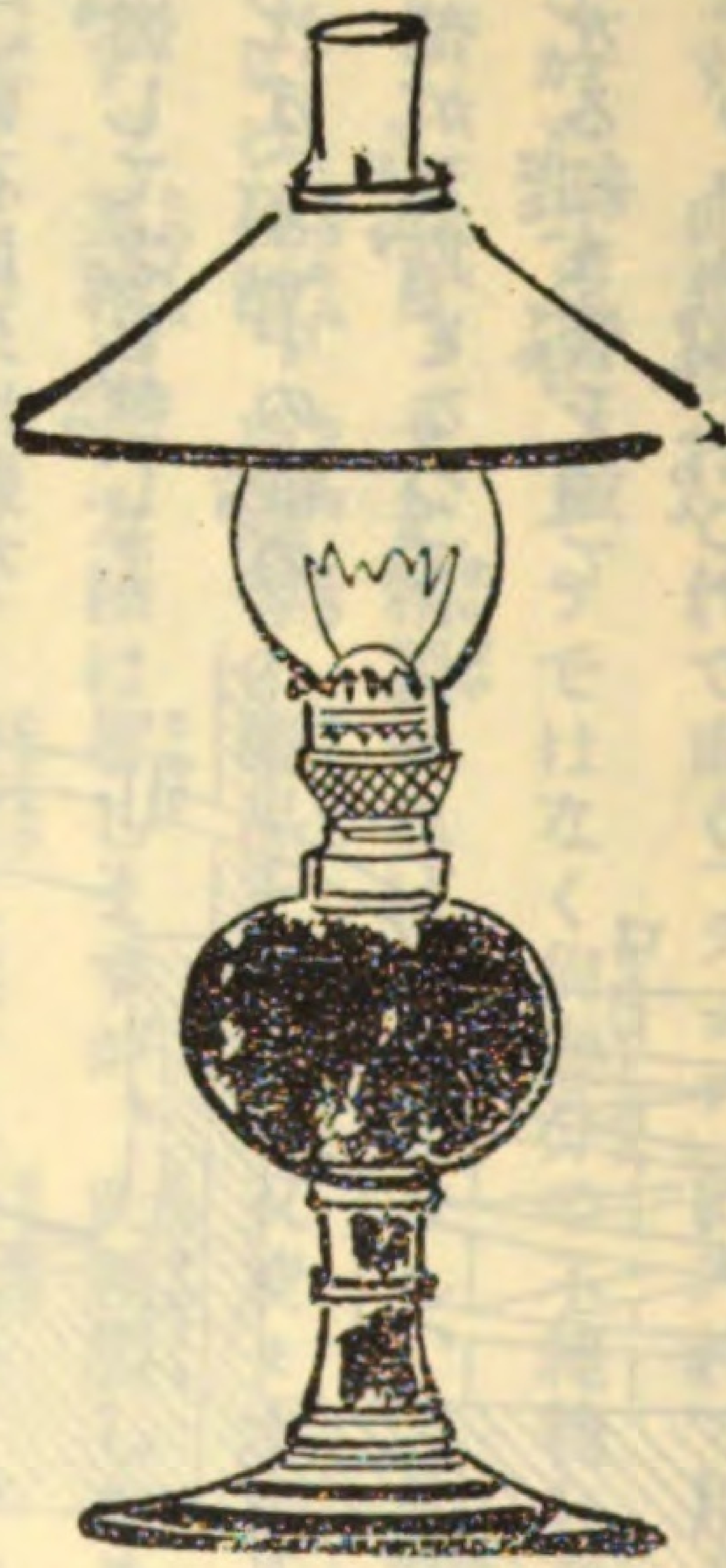
天水生

現今世界で廣く用ゐる光燈は先づ電氣燈、瓦斯燈、石油燈の三つでムいます、其中で電氣燈、瓦斯燈は之をつけるに機械を要し又大仕掛でなくては引合ませんかゝら、大きな町か市の外は之を用ふる事が出來ません、然るに石油燈は僅かに一個の「ランプ」さへあれば如何なる山の中でも避地でも之を燈用する事が出來ます、其上に光が割合に明るくムいます、から今では世界一般に最も廣く用いて居ります、我國でも昔は種油を用いて薄暗い行燈をつけて居りましたなれど、維新以後石油燈即ち「ランプ」の方が行燈よりは明るくて且つ經濟的で至極便利である事を知りましてから、追々行燈を廢めて「ランプ」を用ふるやうになり、今日では田舍の賤か伏屋に至る迄「ランプ」をつける有樣でムいます、故に三十年前迄は世間の人が知らなかつた石油が今日では日用品の一となりました、云はゞ石油は强きものが勝ちて弱きものが敗け、便利なものが盛へて不便なものが衰へると云ふ生存競爭場裡に於て種油に打勝つた譯でムいます。



電氣燈

私は此新勝利者なる石油に就て御話し致し度く思いますが、申上たい事が澤山ありまして、何れから先に申上げたら宜しいやら實は當惑して居る次第でムいます、それでは先づ皆さんの方から御質問を願つて御答へ申す事と致しましやう、どうか石油に就て御不審がありますなら何なりとも御遠慮なく御問ひください。



石油燈

石油は何處から出てくるものでムいますか?

石油は天から降てくるものでなく、矢張り地から湧て來るものでムいますが、水の如く何處の土地からも湧くものでなく、其湧く所は一定の區域があります、世界で最も澤山石油の出る國は北亞米利加の合衆國と露西亞でムいまして、其外にも墺地利、匈牙利、留麻尼亞、加拿陀、獨逸、伊太利、支那、印度等の諸國にも多少産出します、我國でも越後、近江、信濃、羽後、北海道等の地方から出ますが、米國露國の産額と比べますれば極めて僅かなものでムいます。

石油は始めからかく透明にして奇麗なものでムいますか?



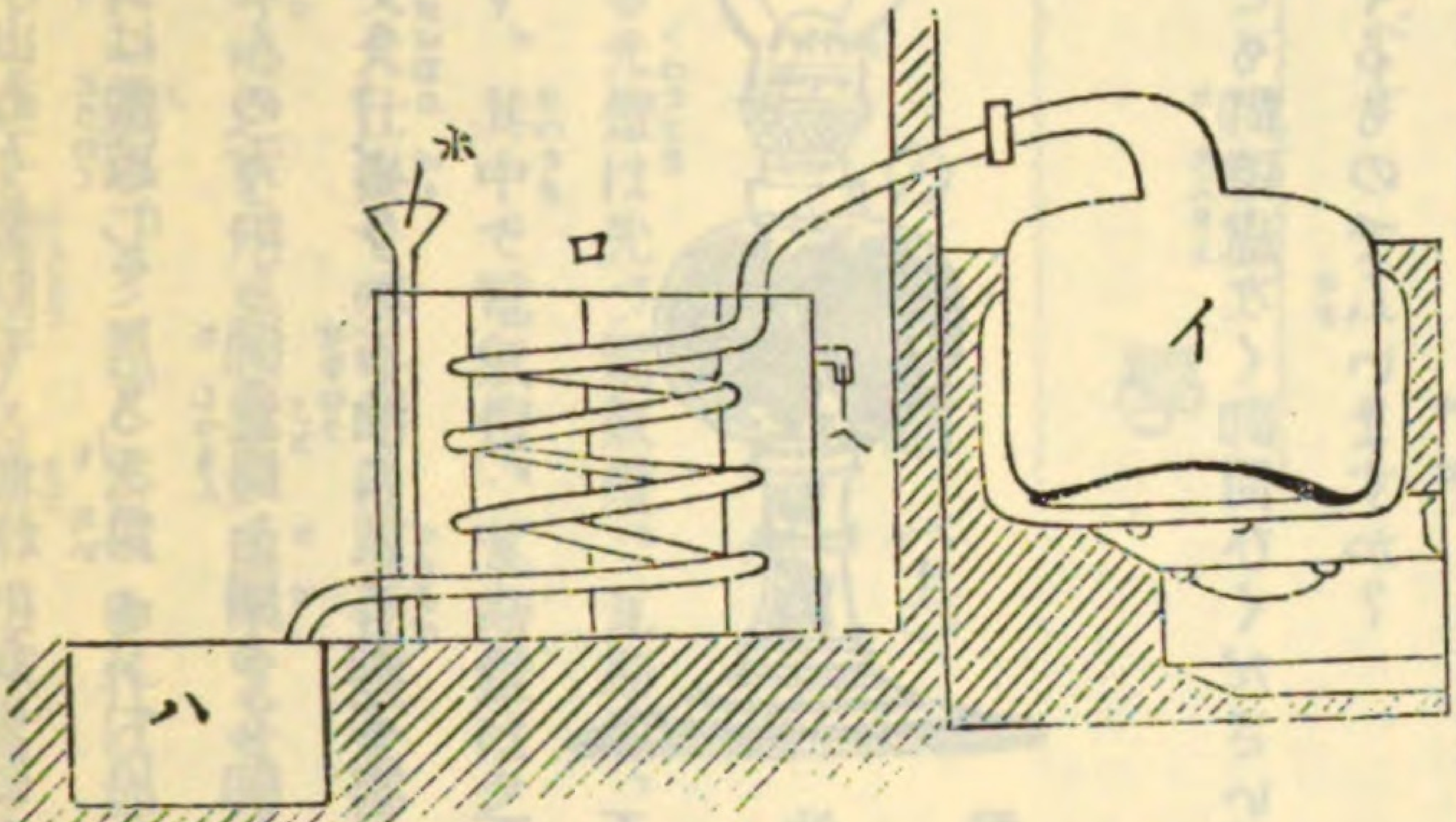
瓦斯燈

否へ始め地中から汲み上げた時は餘程汚ない褐色を帶びたる黒き液でありまして雜物を含て居ります、通例之を原油と申ます。

然らば如何してそんな汚ない液からあんな奇麗な石油が出來るでしやう?

石油の井戸から汲み上げたる黒褐色の液を先づ鐵製の大きな蒸溜器の中に入れて熱します、今蒸溜の方法を

述べる前に蒸溜器の仕掛を申し上げましやう、左の圖は蒸溜器の大略を書いたものでムいますが、(イ)は鐵製の「レトルト」にて蒸溜せんとするものを此中に入れて下の(ニ)に石炭又は薪木を燃して之を熱しますれば(イ)中の液の一部が瓦斯となつて上なる細き管を通て(ロ)の中の曲管に入ります、(ロ)は冷却器と申まして、冷水が入れてありまして曲管の中の瓦斯を冷します、(ロ)の中の水は(イ)より來る瓦斯の熱に



て直に暖くなれば一方の(ホ)より絶へず冷水を注ぎ入れ、暖くなりし水は他方の(ヘ)の口から出るやうにして、(ロ)の中の水を始終冷かにして置きます、)瓦斯は冷されて液となつて曲管の口から(ハ)の中に滴り出でます、(ハ)は蒸溜した液を受ける故に受器と申ます、さて汲み上げたる原油を(イ)なる「レトルト」の中に入れて(ニ)に火を燃して熱しますれば、原油の最も揮發し易いものが先に蒸餾して受器に溜ります、最初に蒸餾して來るものは揮發油と申します、其次に蒸餾して來るものを燈油と申まして、之れが通例「ランプ」に用ふる石油でムいます、最後に蒸餾して來るものを重油と申ます、此三種の區別は比重計を用ひて分けます、即ち最初に蒸餾して來る液の比重が〇・七〇〇より〇・七五〇位迄のものを揮發油として取り集め、續て蒸餾して來る比重〇・七八〇より〇・八二〇位のものを燈油として別器に入れ、最後に出て來る比重〇・八五〇よ

り〇・八八〇位までのものを重油として別に集め置きます、後に「レトルト」の中にはどろ〳〵した黒い液が殘ります之は冷ゆれば固まります、之を「ピッチ」と申ます。

右の如く蒸餾して得たる燈油は大抵原油の半分程に當ります、此燈油はこれで直ぐ「ランプ」に入れて用ゐられるかと云ふに、そうではなく尙幾分の不純物を含で居りますから、之を精製せねばなりません、之を精製するには硫酸、曹達等の藥品を用ゐ、又度々水にて洗ひます、其精しい方法は畧しますが、此精製したものが通例「ランプ」に入れて燈用に供する石油でムいます。

揮發油、重油、「ピッチ」等は何か用に立つものでムいますか？

蒸餾して得たる揮發油は之を精製して、理化學工藝用の藥品に供し又は醫藥として用ゐます、理化學用には他の水、「アコルホル」等に解け難き藥を解すに用ゐ、工業用には「ペンキ」、「ゴム」、樹脂「ワニス」等を解し又羊毛を洗ふ爲めに使用致します、醫藥としては多くは外科の手術の時に局部の魔醉藥に用ひます、即ち局部に揮發油を塗れば直ぐ揮發して其際に其局部の熱を奪ひ殆ど零度以下の過度にしますから、其局部は感覺を失ふのであります、勿論之に用ゆるものは揮發油の中でも最も比重の輕き揮發の最も速なるものを撰ばねばなりません、又揮發油が揮發する際に熱を奪ひ去ることを利用し人造氷を製造します、又米國等の揮發油の價の安い國では之から瓦斯を造つて燈用に供します。

重油の中には石蠟(一種の蠟)を含で居りますから、再び之を蒸餾して其中で揮發し易い部分を取り去り、殘りの比重の重き油を強く冷却して其中から石蠟を結晶させます、後之を搾りて液狀の油を去り再三精製して

白き塊とします、能く精製したる純白の石蠟は主に蠟燭の製造に用ひ、稍粗製のものは「マッチ」製造の原料と致します、石蠟を去りたる殘りの重油は更に精製して機械油に用ひます、「ピッチ」は多少の鋸屑を混ぜて煉り固め壓縮して錬火のやうな形に爲して燃料に使用し、又は多少の粘土と混ぜ合せて土間等に塗りて濕氣を防ぐの用に供します。

史　談

紫　式　部

俳諧堂

桓武天皇都を平安の地にうつしたまひてより後を、平安朝といひ、王朝又藤原時代ともいふ、誠に日本の歴史中にて尤も文華の發達したる時代なり、いはゆる王朝の文學なるものは、いづれも皆此頃の產物なり、年所一千以上を隔てたる今日に於て猶ほ其餘光を見る、豈盛ならずや、豈偉ならずや。

かくまでも文華の盛なりし王朝の時代に於て、其文界の首位を占めたりし人を誰とかなす、紀貫之か、曰く否、菅原道眞なるか、曰く否、小野道風なるか、曰はく否、彼等堂々たる六尺有髯の丈夫はいづれも其人にあらず、却てかよわき巾幗蒲柳の婦人こそ、其最上の位置を占めたり、唯に其當時に於てのみならず、其後六波羅の時代に於ても、鎌倉の時代に於ても、北條の時代に於ても、足利の時代に於ても、戰國の時代に於ても、大坂の時代に於ても、江戶の時代に於ても、又は當今の明治時代に於ても、隔世の彼女は依然其最上の位置を占め來り、占めつゝあり、猶又これより後に於ても占めんとせり、偉なるかな彼女！盛なるかな、彼女！、敬すべくもまた敬すべし、尊ぶべくも亦尊ぶべし、

さて其彼女とはそも〳〵誰ぞ。

菅三品の門に遊びて夙とに秀才の譽たかく、文章生より身を起こして遂に越前守となりし、藤式部丞《藤とは藤原のといふ事なり》、清原元輔が娘なれば、清原少納言といふべきを、清少納言といひ、菅原道眞を菅丞相といふなど、いづれも其姓の頭字一つのみを以て呼びしこと、其頃のならひなり、蓋し支那の風に摸せしなるべし、今の世にありても河内屋太助を河太といひ中屋利右衛門を中利といふなどこれに同じ》爲時が最愛秘藏の娘にして、有名なる源氏物語の作者なる紫式部こそ其人なれ。

紫式部とは本名にあらず、俗にいはゆるあざ名なり、本名はいかにいひしか、各種百般の書籍一も傳ふるものなければ、吾人これを知るに由なし。

然して其紫式部とあざ名されしわけについても古來三種の説のあるなり。

其一説には、その著源氏物語の中に於て、女主人公《主人公といふは小説あるひは物語中の大立物といふことなり》紫の上の事を書きし處、とりわけてすぐれたるが故に《いづれの處とてすぐれざるはなけれども》かくは名づけたりしといひ、

他の一説には、式部こそ、一條天皇の乳人が子なり、上東門院につかへしめたまひにし時、おほけなくも天皇御口づからこれは我が由緣の者なり、あわれと思召せと仰せられにしかば、さてこそ武藏野の故事にもとづき、紫式部と名つけられしと傳へ、

然して終りの一説には、紫とは藤花の色にかたどりていひしものにして、藤の式部といふべきを雅に洒落れしまでに過ぎずと語る。

以上三種の異說、たとひ何れなりともよし、こはたゞおかしき考證に過ぎずして、式部の身に何の輕重をも及ぼさゞるなり、諸子そのよしと思ふに從がへ。

式部はうまれ得て物に敏く、まだ若草の幼き頃より、萬づ人にすぐれてさがしく、兄惟規が讀書するを傍にてよく聞きおぼへ、一々に暗記して忘るゝことなかりしとぞ、されば父なる爲時こそ殊の外に鍾愛し、もし此才を以て男子なりせばいかばかり立身するやも知るべからず、實に我家は此子によりていよ／＼名を揚くべきものを、何とて御身男子とは生れ來らざりしぞや唯この事の一つのみ、世にも本意なし、恨めしゝと、鍾愛のあまり打かこちしとぞ。

長じては和歌に秀てゝ名吟多く（古今集をはじめいろ／＼の集にも出で、又、家の集もあり、紫式部家の集といふ、ついて見るべし）博くからやまとの舊史に通じ文はいふまでもなくいとも巧みに（源氏物語、紫式部日記なとの名文あれば、いま更に事新しくいふもくだなり）兼て大内の式、故實にくはしく、其他百般のこと何の暗き處もなかりき。

時に恰もよし、上東門院（一條天皇の中宮にして名を彰子といふ、御堂關白道長の息女なり）のふかくも文學を好ませたまふ事のありて、世に優れたる俊秀の婦女を多く集め、常に左右に侍させたまへり、されば式部こそ第一の撰にあづかりて御前にまかづ。

上東門院白氏文集（唐の人、白樂天が全集なり）こそ讀みたけれとのたまひしかば式部は仰せかしこみて日每日每に侍讀せり。

右衛門權佐藤原宣孝といふに嫁き、子さへあげしも（流石は此母の子なりけり、和歌をよくし、文に巧みに、狹衣物語の著あり、大宰大貳高階成章といふに嫁せり、後いりて後一條天皇の乳人となる、歌集に太宰三位と出てたるは、即此女の事なり、）所謂前生の緣や薄かりけん、間もなく夫に死に別れ、寡居たゞ文に思を晴らせり。

すべて世の婦女といふもの、少しだも文筆のたしなみ

あれば、直ちに高慢になりて人を人とも思はず、我は顔に振舞ふこと、古往今來變ることなき通弊なり《今の世の閨秀何々とやらいふ名媛達をはじめ、其他の女學生なるものにも、あながち此弊なしといへず》されはかくまでも、世に優れたる紫式部は如何にありしやといふに、全くなみなみに反し、露いささかもさることなく、萬つゝまやかにをとなしく、誠に〳〵謹みふかく、たかき聲だにあげざりしとぞ。



本居宣長翁、《江戸時代の有名なる國學者にして、今の文學博士本居豊穎先生の祖先なり、其著頗多く、其名加茂眞淵に等し》、も其著玉の小櫛に於て、いたくも式部が温和の徳をたゝへ、女の學問して、賢しらがちざへがるとばいみじう憎みて、自からも人に然か思はれじと、ふかく用意したる様、ところ〳〵に見ゆ、といへり。

又其日記に於て、式部みづから、清少納言を許したる言によりてこれを見るも、其事はいと明らかに見られ得るなり、即ち



清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人、さばかりさかしらだち、眞字かきちらしてはべる程も、よく見ればいまだいと堪えぬこと多ほかり、かく人に異

ならんと思ひ好める人は、必ず見おとりし、行さへうたてのみはべるへければ、艶になりぬる人は、いとすゞろなる折も物のあはれにすゝみ、をかしきことも見すぐさぬ程に、おのづからさるまじく、あだなる樣にもなるにはべるべし、其あだになりぬる人のはていかでかよくはべらん、

と書けり。

果せるかな、式部の言の如く、萬づ志たり顔にうちふるまひし清少納言は自からおのが才に破れて其終りを全たふせざりし。

かくも溫和にして萬づうちわ勝の女といへども、其貞操婦節に對しては、誠に金鐵も唯ならざる堅き心、六尺の大丈夫も更に及ぶべきにあらず。

其頃御堂の關白道長ときこえしは、先にもいひし上東門院の父君にして、上の覺え殊にめでたく、世の用ひ誠に重く、威儀は廟堂に輝き、權勢は四海を壓し、殆んど保元の淨海入道ともいふべき極の榮華を極めぬ。

其みづから折りにふれて讀み出でたる

　此世をば我が世とぞ思ふもち月の
　　かけたる隈のなしとおもへば

といへるに徵して見るも、其有樣實に思ひやるに堪えたり。

かゝりければ、世の人々男女といはず、老若といはず、いづれも其門に媚びてたゞ其後れんをのみ恐れしに、式部は獨りさることもなく、其才色に思を焦し、夜ふけて局に忍び來しを、いともつれなく追ひかへし、

　よもすがら水雞よりげになく〳〵ぞ
　　まきの戸口にたゝきわびつる

と、此世をば我が世とぞ思ふ程の人をして、なく〳〵まきの戸口に立わかさしめたるなど、何ぞそれ爽快なる、吾人嘆賞の言を知らず。

溫和貞操の徳をかね、然かも才に長け文に秀てし紫式

部其人こそ、實にも完全無欠なる、婦人の鑑といふべきなり。

其著、源氏物語（江戸の作者柳亭種彦が田舍源氏は、今様ぶりに其面影をうつせしものなり、誠によくもうつし得たりと余は信ず、其夕顔の巻の如き殊に然り、世の俗人をして、源氏伽羅油、源氏紅、源氏香、源氏蕎麥、などゝさもなきことにまで源氏てふ事を用ひしむるに至りしは、全く田舍源氏の功による、種彦が手柄も亦大なりといふべきなり）は五十四帖にわたるの大巻、想を桐壺のあわれに起し、筆を夢の浮橋にとゞむ、古來國學者はいふも更なり、儒者といはず、僧侶といはず、思ひ〳〵に詞を極めて褒めそやし、其注釋の如きも亦殆んど百種ちかくに達せり。

就中、北村季吟法橋が、湖月抄は尤も完備せるものにして、大坂の人萩原廣道が源氏評釋は尤も盡したるものなり、又源氏忍ふ草といふ書あり、極短簡に源氏物語の大要を記せしものにして、速成に源氏を知らんと欲するには最も便利なるものなり。

式部此物語を著はせしを、一條天皇の見そなはして、これ日本記を熟讀せる者にあらずは、決して能はざるのかきぶりなりと、褒めたまひしより、式部は又日本記の局とも呼はれたり。

源氏五十四帖の名をたやすく、記臆なし得る様につくりなせる、源氏文字つなぎといふものあり、左にかゝぐ、其圏點を施せるは、即ち巻々の名と知るべし。

源氏のすぐれてやさしきは、果なく消えし桐壺よ。餘處にて見えしはゝき木は、我から音になく空蟬や、休らふ道の夕顔は、若紫の色ことに、匂ふすへつむ花の香に、錦と見えし紅葉の賀、風をいとひし花の宴、結ひかけたる葵草、榊の枝におく霜は花ちる里のほとゝきす、須磨のうらみに沈みにし、忍びてつたふ明石がた、たのめしすへのみを

つくし、繁き蓬生露ふかみ、水に關屋のかげうつし、知らぬふしなる繪合や、宿にたへせぬ松風も、ものうき空の薄雲よ、世を朝顔の花の露、ゆかり思ひし乙女子が、かけつゝ忍ぶ玉かつら、朧たき春の初子の日、ひらくる花にまふ蝴蝶、ふりきほたるの思ひこそ、其なつかしきとこなつや、遣水すゝし篝火の、野分の風のふきまよひ、日影曇らぬ御幸こそ、花もやつるゝ藤袴、まきの柱は忘れじを、折る梅か枝に匂ふやと、解にし藤の裏葉かな、何とてつみし若菜ぞも、森の栢木ならの葉よ、横笛の音は面白や、宿の鈴虫聲もうく、くらき夕霧秋ふかみ、御法をさとるはそのあま、まぼろしの世の程もなく、雲かくれにし夜半の月、きく名も匂ふ兵部卿、うつらふ紅梅色ふかし、忍ぶ節なる竹川や、八十宇治川の橋姫の、逃れはてにし椎がもと、共に結ひしあげまきは、春を忍れぬ早蕨も、本の色なきやどり木や、宿りとめ來し東屋の、後の名もうき舟の道、契りあだなるかげらふを、おのがすさびの手習は果ぞゆかしき夢の浮橋。

水戸の人安藤爲章の著はせし、紫女七論は、式部を知るによき書なり、志ある人はついて見るべし。

日本婦人の好模範、紫式部が上について、吾人のあさり得たる處、大抵右の如きにすぎず。　《完》

戸塚村の夕

早稻田　仁瓶柳子

（一）

夕日の西に傾けば　空も漸くかすみつゝ
涼けき風のサラ〳〵と　芋葉の露を散らしけり
戸山の兵舍の衛士がふく　喇叭の音のいさ冴へて
野邊の夕に逍遙ひば　鳥も塒にいそぎつゝ
鍬をば肩に里人の　家路に歸へる畦づたひ
門邊に兒等は待ちて居き　夕餉できぬさ呼びたてゝ」

（二）

樂しさは夏の夕暮か　彼方に見ゆる細道を

村の乙女の一二三人り　歌ひつれつゝ笑ひつゝ
翌の朝餐の菜にさて　ちぎりし茄子の籠を手に
「ニットセーニッ新版松づくし」　歌ひつれつゝ歸りゆく
閑けき里の夕暮よ　東に見ゆる森影の
賤が家にて夕炊ぎ　烟りは林を染めにけり」

（三）

何處の家の乙女子か　淺き破笠いたゞきて
脛も露はに破襦袢　荷籠を肩にかたげつゝ
かぞやいろはが待つらめと　草鞋にいたむ足ひきて
あぶなき程にたよ〳〵と　渠れは家路にいそぐなり
けふの商ひなしはてゝ　あすの炊ぎの料を得て
打ほゝゑみて渠妹子は　樂しき家路をいそぎけり」

文藝

瀧の水（二）

春波生

芝田村町とばかりにて、詳しくは聞かず、引きまわしたる角屋敷に、上下合せては二十人にも餘る店の賑はひ、一二を爭ふ町内のたてもの、小島屋の源兵衛とて、茲に數代かはることなく、續く繁昌の鹽問屋がある、世にはいとも稀ぞといふなる、金銀財寶の外、それにもましたる子寶にも亦不足なき數は三人、頭は女にて品川邊へ縁につき、今は早可愛らしき子の母となりて、やがて源兵衛は祖父樣といはるゝ身の上、もうもうためですと頭をなでゝほゝゑみつゝ、逢ふ人ごとにいふも亦内心の自慢である、此上は去年商業學校を卒業した、總領の源太郎によき嫁をとりて店を渡し、過ぎし二十一の春、父なる人に別れて以來、一方ならずいためたる胸を三十年ぶりに休めんものと、唯此事に末を樂しみ、四方八方よりの言込、數多くある中について、彼にしやうか此に極めうかと、妻なるお秀と二人して、屈托の品定め、親元に申分なきは肝要の縁女が氣に入らず、二つ揃へば又親類の端にわるき人のあるなんど、それは〳〵思ふにまかせぬむつかしさ、相

談に日ばかりたけて、今にきまらず、今年も早おしつまつては例年のごとく、萬づ世話敷にまぎれて暫しはとだへ、何事も皆送られたる新玉の春もあれて早、二月は逃げるといへばこれもよくなし、三月は去る四月は死ぬと色々の事を氣にするも至極尤無理とはいへぬ大事の嫁、やう〳〵の事にて先づあれならばと兩親共々、心と心に極りをつけたは、下谷六阿彌陀の横町に夢堂といへる發句の宗匠、去年七月以來御手のものの月次に大抵三度、五度づゝも勤めに來て、たとへの節の八百ならねど、三四百位はたしかに列らべし褒言葉、さほどにはなきも今の世の機關とは打つ變つたる身代のかたき、石田德次郎とて、根岸金杉の質屋にして、あたり第一の大地主が季の子にお菊とて、今年十七、隱居所の婆々樣が、秘藏ほんさうの娘である、諸藝何一つ暗き事なく、容貌も亦なみ〳〵よりは超えたる方、あれなれば必らずと、極めたる的のあわれや美事にはづれたる、源太郎の不得心、御詞をかへしては恐入れども、茲兩三年御まち下さるべしとは、何にしても不思議なわけ、さては外々に當人心あたりの者でもあるかと、母の親の事によせて聞いて見れども埒あかねば、かねて學校以來、兄弟にもまして中のよき友達なる、石町の糸屋の次男前回に出たる内海芳太郎の口をかりて、よく〳〵内心を聞かせしに、去年小金井の花かへりに二人連にて傘かりにより、引あけられて一石の勝負がそも〳〵の初にて、好の道にだん〳〵と交はりは今にふかき、四谷堀端の酒屋金岡勘太郎が娘お峯とてこれも亦今年十七の當世そだち、必ずあれをとの事の一々、きいてとる芳太郎、中々釣合はぬ縁談なれば、迚も兩親の氣に入るまじとは承知ながら、御たのみのおもむき、早速に伺ひました源さんの本心實は斯樣〳〵かう〳〵の次第、なる程御心には染むまじけれども、本人たつての所望、全たくは茲にあり、餘

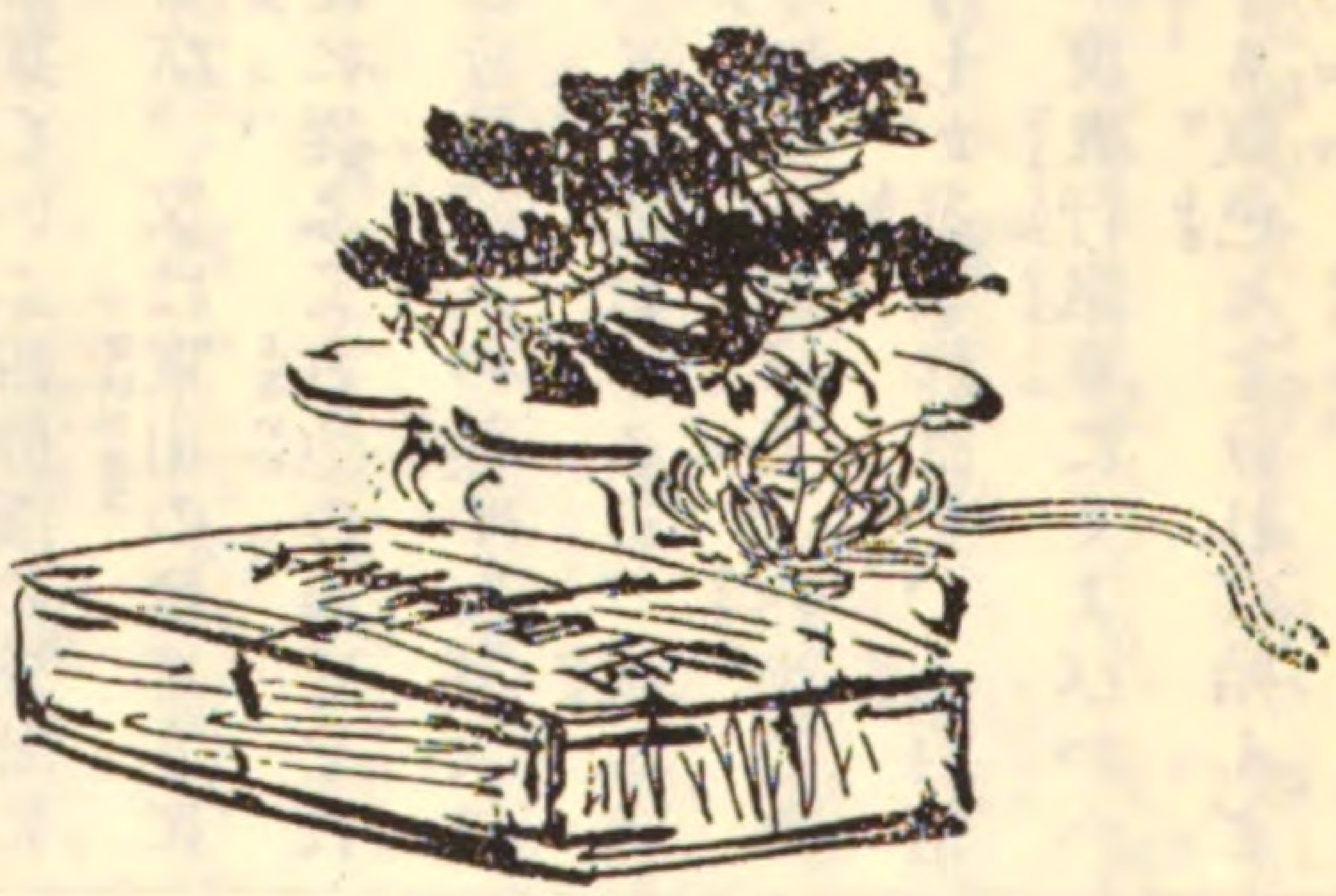
の外々より氣に入らぬものを押付業も異なものにして、其故にとんだ不心得ひき起こしたる例は世間に少なからず、何分にもまづ、よく〳〵御勘考あるべしと、きいた其儘を父源兵衛にも話せしに、本人左程までに思ふなれば、兎も角もと承知でもなく不承知でもなく通り一邊にきいてをき、扨て其翌る日に自から行き且つは又、人をも入れていとも詳しく、聞きあはせしに見かけにもよらぬ一々、家柄は先祖代々立派なれども、なみ〳〵ならぬ火の車、新川の問屋なんど何處とても心よく通る家もなきまでの不信用、ほんの當座その日〳〵のやりくりにて、店だけはしめず、看板僅かに軒にかゝる近頃の内部、せめては昔の半分だけにもかへさんといふ主人の思はくも、中々以て急に運ばぬ事のまだるく、人間ゑてしては斯うなるもの、昨今は空米にさへ手を出して、一攫千金のるかそるかの危い事、遠からぬ内鮫が橋へ轉宅とあたり近近口々の取沙汰、ほんに〳〵驚きました、全体かしこき若旦那あの様なところへ目がつくとは、魔がさしたので御座りませうと、餘の事までも添へての復命に、成程々々おれも少しは聞いたれども、それ程の事とは今がはじめて、たとひ源が何といはうが、どうして〳〵そんな所とは思もよらぬと、父親の不承知に源太郎今更の如く失望なし、たれこめて頻りとふさぐに、母親のいとゞ氣をもみ、さきの親御たとひどんな事に凝るとてもそれは其人の心得ちがひ、其人と縁組したとて、それが此方へうつるといふ譯ではなし、殊に又、源も今の世の教育とやらを受けて人となりたる若者の、了見は我子ながらも人に後れず、適ばれなる魂、よしや近しくなるとても朱に交はるの氣遣ひなんど、決して〳〵あることとなきは私が太皷の様な判を捺しても請合ひます、事と品とによりさへすれば血統のよごれたる人々とさへ縁組するは珍しからず、源が此頃の摸樣あなたの頑固

にいよ〳〵ふさぎ、病氣にでもなるか又、もし不身持でも起したなれば、それこそは眞身上の一大事、ほんに私は此間より夜の目も合はず、此年になつて今までになき胸にあまる心配の山々、今日は〳〵と唯あなたの顔色ばかり見ては言ひ出しかねて居りましたが、何卒御得心あそばして、四ッ谷の娘もらふときめて下さいなと、割ッつ口説いつの寐物語を初の内こそ兎や角といひたしなめて居しものゝ、度重なる内には少しつつ解けてゆく心のだん〳〵と其氣になつて、されば是非なし、其事に極めやう程によく〳〵源にも言ひきかせ、お前も油斷はなりませぬぞ、幾何ら學問をして居ても、才が走つて居たとても、世の波風にもまれぬ身のふはと旨い口に乘りて危ない事に手でも出せば、實に御先祖に對しても我々夫婦がすまぬわけ、呉々も忘れぬ樣にと、後々の事にまで氣をくばるは流石老功の父親、ふせう〳〵ながらも得心とは此上もなき儀なりと早速こま〳〵と離亭にうたゝねの源太郎を起して語れば、ありがたき母の心、心配かけし事の勿躰なく、何ともいはずも玄〳〵としてうつぶきしは百千の詞にもます心の色といふのである。

此上は片時も早くと、横町の醫者を頼んで媒介の役目、萬端の話屆き、結納と名つけたる五百圓の金にて女一人買つたも同然、衣裳こしらへとて、ほんの並一通り、小島屋の嫁にしては御粗末と、町内の風潮あちらこちらに喧ひすし。

久々の大金に勘次郎のよろこび、イデ一番と婚禮すんでの七日目に例の如く車を飛ばせた蠣殼町、さがりを見て買ひこんだ事のまんまと圖にあたりて二日たゝずに千と纏まつた金が金よぶ世のたとへ、儲かるにつれていよ〳〵圖に乘り、今一度でと力のかぎり買〆めた次の日より、玄り〳〵さがりて果てはたう〳〵もとの木あみ、僅かに二ヶ月たゝずに元も棒も時の間

の夢と消へ去り、せめて今二百だけでもあればと、外の事にしてこま〴〵しき無心の狀、父親に見せば事むつかしと、ひそかに母に相談して整へ渡したを始めとして追々と度かさなり、果てしなければ誠に當方も近頃仕込の時節にてと斷りの返事、すげなく使をかへした三日目に車を持せて、お峯こと兩三日おかし下されたしと、母親からの口上にてむかひに來たを、元より疑ひこばまん筈なく、土產の品まで整へて送りかへしたるま丶三日たつも四日たつも、つひ十日たつもかへり來ねば、もし病氣でもなきにやと心配の旨、筆にいはせてむかへに遣つた年嵩の下女とぼ〴〵とうてぬ顏して



一人かへり、見て來しま丶を斯々と語るに母親急にがんづき、さては此間の無心、二つ返事で聞かざりしを根にもちて引きとらんといふ心なるべし、初め旦那のいはれし通り誠に末が覺束ない、家の爲じやさつぱりと思ひあきらめる樣と源太郎に言ひ含くめ、又父親にも話したるに、それ見た事か、最初から必らず斯うと見て置いた、おれがねらひは違ふまへ、と早速媒介の人をよんで此事さきへ言ひこませて短かき緣は玆にたへた。

其後は世の中更に可咲なく、することもなく唯ぶらぶらと昨日今日と送る日の過ぎ行く內、人づてに金岡勘次郎こそやりくりの綱きれて、何處へやら知れず夜にげの樣に引こせしと聞くに何となく心の濟まぬ樣な心地、夕方の人顏知れぬ時分、通りながら見れば、ありしま丶更にかはらぬ店は同じ構へなれど暖簾の文字も違ひ、帳場に座れるも知らぬ人なるを哀れに覺ぼへ、

其まゝ車にて歸りたるあくる日の朝早く、一通の書置きを書齋の机の上に殘し、先の年同窓に語りたる友をたよつて京都に出で、今出川のさる寺に線香をかぐ俄道心、座禪觀法の隙には原何某といふ四條派の畫師について、丹青濃淡の道をまなび、又は東山のほとりに花の本の流れをつぎし、宗匠に從ふて古池のあとをたどり、うたゝ世の中に望みなければ人の羨やむ莫大の財産悉く弟に讓りて更に惜しとも思はざるを、笑ふ人あれば、又憐れむ者もある中にとりわけて、內海こそはそも〳〵の初、つれてよりしが基なればと、人百倍に氣の毒がり、大方は月に一度直行汽車にてよびかへしに行けども、かへらん樣子も氣色もなければ殆んど困り果てし時しも、思はず根岸にて落ぶれ果てし金岡の母親に出逢ひ、逐一に知り得たる今の摸樣、お峯の身の沙汰、芝へゆいてひそかに母なる人に語り、さて如何なる御考へときけば旦那こそ何といはるゝや知らねども、是は私一人の考へ、家は弟に讓つて志まひたる今更なれば、相當の分家でもさすより外なし、それにつけてもまことと金岡の娘源太郎に情たてゝ、其後どこへも行かずにか、是からさきへたしかめて置いて下さいと、きく一々をよく飲込て內海其日はそのまゝかへつた。

十五夜の月

はなぶさ

中秋の月は深く天心に痕し、不時の霜を庭の砌に投ず。南に向へる四疊半の耳房あり、欅椽の拭い着けて、鏡の如くなる眞中に、わびしく座せる、廿二三の女性を見る。一吹颯と木の葉を鳴らし、鬢を掠めて去れば、綠髮歷亂として芙蓉の顏を掩ふ、厭はしと搔き上る、白魚の如き手、凄き程の美なり。浴びたる霜に身を縮め、獨り言つゝ、

『直に歸るとて、弟を倶して出で給ひしに。母上は何故して、歸り來まさぬぞ。』

と寂しさに、堪へざるもの丶如し、漸くにして、垂れたる頭を、力なげに擡たげ、吐息つき。嗚呼妾ほど、不幸なるものはあらじ、過去如何なる罪すれば、斯かる悲しみは、見ることぞ、思ふまじと思へども、意馬とやらん、叩へんとするほど、躍ね立ちて、頃者は食事の甘味もなし、爲す事も手に就かず、母上の何をぼんやりな、と叱りはあれど、何條も平氣には居られぬ。彼の人の、親切と義氣に羈されて、幾度か、口までは出でたりしも、若やしと、其となく搦きみれば、大望ある御身は更なり、義理深く辨ふる御人、其貴ふとさ、所詮及ばぬと、と斷めても、猶彌增るおもい、寧そ初より、遭はざりしかば、此の苦も見まじもの、否々勿體なし、會ふたればこそ、三四年來の、辛酸を免れ、母子三人安隱に、此頃は食物の不足も云はれる、是併しながら、皆彼の人の賜なり。世に義理てふもののなくば、御出世には礙なきよう、幕乘りてなど、御居間の掃除も、爲て進げたけれど。御親切が、今では仇になり、却つて添はれぬ、遠慮となる、已矣誇らばそしれ、斷つて主張んか、あなかしこ、折角秋毫ほども汚りなき、水晶の如き清き、彼の人に、目的ありての、膽煎なりしなど、得知れぬ輩に後指でもさゝせては、人非人。女の淺ましと、よの萬人より、彼の人一りの賤視は、死しても瞑むらず、愛しと思ふからは、せめて瑾つけぬが、女の戒、とりや何樣あつても、心の猿を去らずばなるまじ。斷然さる徒し心は、夢にもみまじ、實の兄樣持つたと思ひ、恩報じこそ肝腎ならめ、さはれ彼の人を措ては、片時も佗澳に嫁ぐ心はなし。

＊　＊　＊　＊　＊

帝國大學の近傍に、一軒の雜貨店あり。以前はさある豪家らしく、間口五間に餘まる一と構へ、久しく修繕

せぬものから、壁は骨を露はし、軒傾ふき、廂の雨日に曝されて、墜もやせん風情なり。店の飾りなる貨物は、大底賣り竭して、唯だ筆墨の、店の一隅にちよんもり、順序なく幷びたるが、愧かしさうに、隱れぬばかりなり。佳き品は售られて、擇り殘しの二割ものゝみ。顧客の足は次第に絶へ、門前雀羅をはらぬばかり、可惜商賣の好塲處も、寂寞云はんかたなし。小僧の居ぬに、掃除も屆かで、輝き渡りたる、柱敷居の、曇り勝なるも哀れ。半ば閉ぢたる戸は、猫さへ居にくゝて、鼠の店先を、橫行するに任かす、日々細り行く親子が身は、其日の活計も立ち兼ねる、淡き烟にも似たり。廿餘りの娘、何やらん包みたるを脇挾み、此の荒れ家の前に來りて、褪めて黄ばみたる、蝙蝠をつぼめ忙がはしく内に入り。

『母上只今』

とはんけちにて、頭の邊りを拭いながら云ふ。

『オ、今なるか、嘸熱かりつらん、水でも浴びて、此處の風通しよきに來よ』。

と五十の上五ツばかりなるが、降りつもる霜は齡よりは多く、深く刻める額の波は、暴風のさしも强かりしを驗しつゝ、一間を立ち出でゝ迎かふ、娘は勝手に入り、さびたる鐵盥を持出て、井戸端に行き、釣瓶を卸しながら、「此の井の深きと、一杯吸むさへ大底ではなし」と、眞白の筍の如き腕を、惜げもなく、かき露わして、竿の硬きに堪へぬ風情、井戸側より、連りたる牽牛花の、蕃架に匍ふて、螺の尻の如く、ねじれたる蕾を、一ッ二ッと數へながら、「明朝は廿ばかり多く咲くべし」と樂む間、釣瓶を引き擧げ、盥に移して、兩手を差し入れ、「オー冷めた氷の樣なり、仕事塲の水は、濁りて湯の如きも、自家に歸れば、此が何より」と軈て行い了りて、今や耳房に來る、室は南に向いたる小奇麗の、風通し好き四疊半、櫸椽も此處に在り、母は入り來る

娘を迎へ、「今日は獨りにて堪へざりしに、黒川樣の御出を、拉へて今まで思はず過したり」、と振向くに、起き直らんとする、黒川を見て、「御構あるな」と制す、娘は黒川と呼ばれし男に一禮して、團扇乗上げ、鬢かき撫でながら、頻りに扇ぐ。

黒川と名づくる男、齢廿三、色淺黒く、脊高く、脚伸び、筋骨逞ましくして、天晴劍佩かせても、見たき武人なり。今年大學に、入校したるばかりに、學資の源、早や涸れて、一時はほと〳〵、困じたるも、素より材幹あるものなれば、敎師も深く之を愛し、周旋至らざるなし、此の男、好きこそ物の上手にて、柔術の奥義を極め、四段と云ふに、加納の四天王と、呼ばれたり、幸い學生の望あるに、校内に道場を設け、師として若干の、月俸を給しければ、學資と糊口には、乏しからざりき、又友人の勸めにて、校外に一軒を志つらい、雜貨店の三軒越の隣りに、引移り内弟子も幾多ありし、黒川今は一家を持ながら、道場の習として、拭い掃除は、弟子より輪番に爲したるも、食時の調度に困じたり、彼是と圖る中、雜貨店の子、十三なるが、弟子中にありて、此の由を母上に乞いて、黒川は三度の食事せんと、雜貨店に通ひける。

固よりむくつけなる男、來りては喰い、飽ては去り、始めは愛相も世事もなかりしに。次第に馴れるは情ある習い。口不調法の男も、老婆の親切なるに、一言二言交へて、遂に親子の如くに親しみぬ。其秋の中葉、日曜日の晝飯了りて、寂しきまゝに、老婆と黒川とは、親しき中に横臥して、四方八方の話してありしが、黒川俄かに老婆に向い。

『僕は久しく老母に、問はんと思ひつゝ、機なくて默したり、見れば此の家も、以前は富限なりしならんに、今は家内も少く、有福とも思はれぬが、必ず事情ばしあらん』。

『好く問ふて下されたり妾此を想ふ度數々胸塞かりぬ』

夫が在世の時は、此のわたりにて、一二三を争ふたる富限なりし、數多の下男下女を使い商賣も面白く運び、貧乏てふものをば知らざりし。左はれ物盛んなれば衰ふとかや、世の浮き伏しは爭はれぬもの。不幸にして夫身まかりて後は、眞の烏夜今まで篤實と、信みたる番頭等は、鬼と變じぬ、放蕩に身を持ちくずしては、弱主に難題を懸け、遂には落城に入りて、分捕する兵卒の如く、小僧迄か、妾弱主の眼を竊みて、逃持げするに至り、僅か半年經たぬ間に、見事主の家を倒しぬ、今は海嘯に掠められし、空屋同然。尤も唯一の親類より、貰い受けたる養子もありしかど、十六の時より放蕩を見習ひ、五年の間自家に居ると稀れに、初めは親里への遠慮にと、夥多しき金をも、色にも出さで、濟せしに、夫か危篤にさへ歸り來ず、夫も遂に立腹して、所詮家督には覺束なしと、離縁して、失せしなり、此事を含みてか、親類も妾母子の難詰も、空吹く風、誰一人り見返るものなきがまゝ、妾の貯も少しは在りしかど、座して食へば山をも盡くすと、貧の極は御覽の通り、只子共の成人を俟つのみ、姉は妾にと勸むる人あれど、貧すれば人に侮られることそ悔しけれ、人の玩弄となして、先夫に何と分疏せん、去るとはいかなこと、又好き緣ありと、世話する人もあれど、娘は母上を捨ては、何處へも行かずと、朝は早くより仕事場へ行き、夜は仕立物やら縫直しの賃仕事に、漸く其日を送るまたら、哀れと覺しめせ。餘所の娘達の、衣裳の贅澤やら芝居花



見に夢中になる時も、娘は徒し心は、鴉の毛ほど出さぬいぢらしさ、親の身となりて、世が世であらば、と思ふは日に幾度と、涙ながら語り終るを、黒川は幾度か嗟嘆して、聞き居たりしに起直つて。

『そは實に悲しき話なり、しかし此れ程の家、必ず貸し付けもある筈、夫れも盡く分らぬにや』

『左に候其貸付も數多ありしも、多くは夫の心覺へにて分らねど、證書二三十もあるに、御覽候へ、然し恐くは反古ならむ』と、

箱のまゝ持出す、黒川は一一見終つて

『必ず案じ玉ふな僕惡くは圖ふまじ』

左なきだに、義氣に富める黒川、此の慘鼻な、話を聞くからに、生得の俠任今更に焚へ上り、旁ら母子を慰めながら、暇を竊みて、貸金の懸合に餘念もなし。初めは他人の、要らざる差出と、一も二もなく躍ね付けしも、混りなき義心と、理義判明の主張に、强慾非道の負債者も、拒むに道なく、着々其方をぞ付けたりけり。されば其年の暮には、如何がはせんと、もだへたる母子も、樂に大晦日を送り、初めて新玉の芽出度を迎へたり、其れより黒川の指圖にて、店巡りも修復し、品物の仕入をも爲し、專ら商賣に力めければ。枯木に花の返り咲き。人氣次第に恢復し、顧客の足も再び頻繁とはなりぬ。養子の鄉なる親類にては、母子が辛苦を氣味よしと、眺めたるまゝに、次第に挽回する家運に、遺憾やるかたなき折柄、黒川とやらん、筋目も知れぬが、あらずもがなの後援と聞き、要こそあれと、遂に根も無き、蜚語を放ちて、諸所の贔負を割かんとぞ務めける。

珍らしきを、聞きたがるが人情なれば、針小を棒大に、言ひふらすも人の僻ならむ、黒川が宿泊こそせね、日々三度の食事に行くさへあるに、母子が神さまとも敬い、下にも置かぬ優待に、善惡なき隣家の、井戸端會

識には、已に養子に定まりしとまで、云ひ囃すに至りぬ。

悪事千里とは好個の譬へ。固より黒川と此の家とは、些の怪しみもなけれども、兎や角くと言ひたがるは、男女の間なり。種々の風說蝗の如く飛び、疾風の如く走り、早や學校一ぱいの噂さ取り〲なり。校長も此事を聞きてより、氣象彼が如く、希望彼が如き者なれば、まさかと思へども、思ひしより、進みたるは男女の間にして、規矩もて測り難きも、此の怪物なり、萬が一左るとあらば、學校の體面に對しても、默だされず、誤た彼が大失敗ならむと。取つ置つ、私に心を痛めける。かねて黒川が、優柔無頼と賤しみたる、所謂風流才士連は、時こそござれと、恰も反逆をはじ、見出したるかの如く、口を極めて、讒謗しければ、弟子も次第に退き、學校の道場さへ、稽古を怠るものあるに至れり。黒川が無二の友二人は苦心の末、或る日七草見るに事寄せて、墨堤を歩きながら、此頃の風說のよ、校長の苦心のよと詳しく、打語りけるに。黒川は意外の寃罪に打驚き、一片の俠心に訴へたるを、さも目的ありてなど、社會は斯くも無慈悲なるかと、嗟嘆幾番して、君等の忠告千金よりも尊し、然し僕未だ左ほどまでに愚ならず、幸に安んじ玉へ、以後決して彼家に足蹈すまじと、矢はんとするを押止め。二人は口を揃へて、君か斯く聞て、其決心は尤、僕等も滿足せり、然し夫は己を潔ふするを知て、人を顧る薄きの嫌あらん、今君彼の家に行かざれば、己が明は十分なるも、彼家の迷惑は大ならん、僕等の忠告は、左る無情なるものにはあらじ、萬一君の不了簡を恐れしばかり、君今彼と絶たば、君が初一念の義心も、水泡に歸せん、若し校長以下に至りては、僕等不似ながら、自ら保證せん、と磊々として泥まざる親友の間、素縞を水に曝すがごとし、然とも黒川は、餘り世態の浮薄なるに、

慣りて、一週間も雜貨店に行かざりしなり。

此處は東都百萬の、半を折つて北なる、鳥邊野なり。古墳累々として居並び、今古幾十萬の魂を埋む、名譽の稱表あり、嘲罵の懲銘あり、古より幾億の人類が、活潑々として動くと雖ども、誰か遂に此土に化せざるものあらん、老て枯木の如くして、倒るゝあり、野望嶄然の間に、顚るあり、呪はれたるもの、戀に失墜したるもの、一たび此の關門を通ずれば、等しく千古に靜なり、されば此の土を問ふもの、亦赤裸々として其初めに復す。斯かる處に同胞と覺しきが、石碑の新たにして篆刻の判明なるものに向かい、姉なるは花筒に、樒の一束を植つれば、弟は線香に火を點して、香籠に置く、水漑き掃除終りて、左右に跪ぶ、合掌し瞑目所念す、次第に眼瞼の濕ふて、立たんともせず、昔の事共思出てたるらし、樒に閉ざされ、頭文字の讀まれざるも、居士と刻みしは同胞か父とは知られたり、姉は耳之立兼ねてありしが、思ひ切て起き上り、弟を促がして、蕭々として墓前を辭す、あゝ父上の在しまさば、些の難儀もなかりしものを、彼の人の如き、勇ゝしき情ある、人に嫁くも安けれど、とうつとりとして在りけるが、弟は目覺く、白犬の黑斑なる犬を逐ふて、過ぐるをみつけ、白がと云いすて、馳去りける、姉は取り後され、猶更力なく、打萎れて徐々と歩き、今や漸く墓畔を出でんとす、折りしも人のけはいに心付き、と見ればまぎれもなき、黑川にてありき。

女は今更に胸轟き、顏紅らめ、地にも入りたく、忸怩として頭を猶し、垣根にイずみ居たりける。黑川つか〳〵と歩み寄り。

『綠さん御墓詣でなるか、獨りにてか』、

『左に候弟と參りしも、弟は今しがた、犬を追從して、妾獨り殘されました、貴君には、圖書館の歸りにてこそ候はめ』。

『然り今漸く調べ物を終へ、歸家する處』
さらば是より御共せんと、天王寺わたり入り合いの鐘、鏗々と四隣に響きて、暮色蒼然森の下暗を催し、炊烟盤桓として風死す、二人は暫時無言にて、二三丁進みしが、緑は思い切て口を開き。
『黒川さま此比頓斗御出なきは、御病氣とも見受けぬに、御氣に染まぬとばしあらん』。
『中々以てさにはあらず』
『若しや御身の上に係りてか、御曇りなき大事の御身、露ほどにも毀つけるものあらば、妾承知しまじ。さはれ黒川さま、女ほど世に幸なきはあらじ、戀する人、否戀する親に分れ、便りなき身は、久松に分れし、於光も同然』
『何が何と』
『否昨夜無聊のあまり、寄席に參りしところ、野崎村の語りものにて、於光が可哀きの餘り、口走りたるまでにはべる』。
『御身は淨瑠璃を好みてか、彼の半七が酷く當るとも、於その愛は深く感じたれば、心には拜みもまつらん。今の青年が、半七如き馬鹿げたる義理とやらんは知らざるも、呱々として生を稟けてより、國家に盡くす職分と、云へば六ケしけれど、斯樣なるものあれば、思ふまゝに就らぬ事多し。昔し宋江義俠にて救いし、扈三娘を王英に與へしも、其初一念にて義者の潔白。あゝ思はず不要事まで申したり、此の四ツ角は丁度、僕の家への路、さらば御離れとせん』。

雁のたより

桐廼舍

昔室の津にうきねとよべる浮れめ有けり、此をみな京に住ける頃はいと豐なる家のまな子なりしが、おもちゝのめつるあまりふり分髮もかた過ぬ秋、嵐山の紅葉

狩にゐていにしに、俄にまがことおこりてあしきやつこに取さられて、憂年月を重ねつゝ、終に此處にたゞよふ身となりしとか、さはれ顔かたちのあてなるたとへんものもあらねば、まことの人にはあらじ、月のみやこにかへれる姫のふたゝびあまくだれるなめり、などいひはやすに庫もちのみこならねど、わかうどちかたみにきそひてありかよひつゝ、我こそ得めと物などおくりぬれど、いかなる心にか何方へもなびかざりけり

ある夜月のあかきを愛で、うかれ來し都人のみぞ、深くあはれとおもひたれど、さればようかれめのあさき心にいつまで志のびはてんやと、人々にをゆびさゝれんもうしろめたしと、猶つれなくてかへしやりし後はおもちゝをこひぬる事も忘れて、世の中うらめしうかなしきものと思ひなりて堪かたきまゝに

かりそめによりてかへれるあだ涙に
　　雲か袂はいまもぬれつゝ

とよみておくれるに都人もさすかに捨かたくてや

和田津海の底の心も汲ずして
　　たゞあだ涙と人は見にけむ

などいひかへしたるを命とたのみて三とせはかりは折々に心をなくさめしがはてはかりのたよりも絶はてしかばをみなうち泣て

渡りあふ事もあらねば水くきの
　　あとさへいまは絶んとすらん

などひとりたちてそなたの空のみ眺暮しゝに霧ふかきゆふへとひ來し翁ありこは彼都人の使なりと聞て嬉しきまゝにはしたなう出て見しに彼の翁いとおもなけに彼君は此頃うせたまひしかやつかれにのたまへることもあればそをつけまゐらせんとてまゐりぬといふあまりの事におもひまどひて我にもあらずかたへの硯ひきよせて

露と君消えしときくは久方の
　そらことならしまことといへ鳫

とかきて翁のかたにおしやりつゝよくを伏しぬ翁も鼻すゝりつゝなぐさめて實に〳〵聞しにまされるおことが心の清さよいで此濁りにしまぬ花蓮を根引して手向草とせは亡魂もいかでかよろこびたまはんとく〳〵とて黄金あまたとり出て萬の事とゝのへて小車にかき乘せて走らせぬうきねは夢に夢見し心地して天の羽衣ぬきかふるいとまもなし旅路の憂さも知らでかしこに至りつきしにいかめしき構も泪にくもれる眼にはとまらで引るゝまゝに奥にいりしに思ひしにも似ず家の内さゝめき渡りて嫁君おはしぬとよろこびおへり心なの人こよとわつかに彼方を見やれはあなおやし心のまとひか彼都人は昔見しにも立まさりてさまよふそうそきてほゝゑみつゝつゑゐたり、猶うらやからにやあらん、さはにうとひたる中にかしらたちちたる四十路はかりの夫婦つとさしよりて、右左よりうきねを見て、あか娘花子は散らでありしよとてよろこびあまりて泣ぬ、使人にいて立し翁は都人の父か假初の姿成けり
高砂の浦浪靜に唱ひ納て後のことは知らず
幾とせか經ぬる秋さりたる鳫の聲を聞けば、彼都人は公事のおほへめて度外國かけて名を輝し、妻の花子はよき實あまた結ひたりとか

當世女流俳句

なにがし撰

母のなき子の風ひくや朝寒み　みれ女
葛の葉の裏がへりたるあした哉　たか子
白菊のうれ殘りたる夜店哉　春女
都人あれきこしめせ砧うつ　むら子
婚禮の式むつかしき夜永かな　久子
何處までも流に沿ふてすゝき哉　田村蝶
赤は菊ばかり植たる垣根かな　糸女
明月や小だらひの中限もなし　喜代子
神棚の栗ひいてゆく鼠かな　雪女
蜻蛉や里の子供の五六人　政子

兎角世は月見のばんに雨がふる　つる子
京都から到來したる蕈かな　竹女

談叢

漁師　湖處子

こは古くより英國に傳ふる寢物語中の一話なり讀者その心して讀みたまへ

昔のむかし、ある濱邊の疎屋に、夫婦の漁師が滿足で住んでゐて、毎日釣に出かけて居ました。

ある日漁師はいつものとほり、濱に出でゝ、餘念なく釣を垂れて、今か／＼と獲物のかゝるを待つて居ました。すると程なく浮木が沈んだので、心得たりと、手早く竿を撥揚てみたれば、それは／＼は非常に大きな比目魚が釣つて居ました。こんな大きひ獲物は、初めてのとですから、漁師はいたく驚きましたが、比目魚はそれよりも猶一倍狼狽、『親爺樣何卒お助けなすつて下さい、私は魚ではありません、實は魔術の長で御座います。だから煮たつて燒たつて食へはいたしません』と云ひました。漁師は誠に正直な悲慈深い男でありましたから、そうかそれは氣の毒なとつて、早速遁してやりました。

漁師はわが家に歸りまするぞと女房は待ちかけて今日は何も捕つてお出でないかと問ます。漁師はこのとを女房に話しました。すると不滿足な女房ですから、大變の不機嫌で、『それはお前さん惜しい事をおしだね、しかしもう遁した後ては仕方がない。せめては其比目魚に何か賴んで來ては如何だへ、私はこんな汚穢くるしい家に居るのは、もう／＼嫌でならないから、如何だへ、も少し奇麗な家を造つて呉れる樣に賴んで來ては、比目魚は必定お前さんの賴ならどんな事でも聞て呉れるに違いないと云ひました。亭主は斯んな事を賴むのは

善くない事とは思ひましたが、また女房を喜ばせてやりたいと思つて、とぼ〳〵と濱邊に出かけました。海の上少し黒ずんで、もの凄く見えるので、亭主は何となく怖氣だちましたが、心を勵まして、「比目魚どん比目魚どん」と呼びますと、比目魚は「何の御用」と、水の上にニユツと顏を出しました」。『己れは最前お前を助けてやつた漁師だから、よもやまだ忘れはすまい、就ては己れもお前に願がある、おれの女房が瓦葺の家に住みたいと云ふがどうぞその瓦葺の家を一つ造てはくれまゐか。』『それなら親爺樣、心配なさらずと家に歸りて御覽なさい、きつとおかみさんのお願通りになつて居ますから。』

亭主は家に歸へつて見ますと、比目魚が云た通りに、汚穢くるしい堀建はいつのまにか消えうせて、立派な瓦葺の家が建つて居ました。

女房はにこ〳〵しながら、門口より、さあ〳〵お上り、大變奇麗になりましたと、手をとつて曳き入れますので、亭主は家に這入て見ますと、なるほど以前とは打て變て、客室も出來て居れば、ストーブも出來て居れば、また寢室には、澤山な新らしい柔かそうな蒲團が積んであり、そのほか世帶道具から、料理道具、何から何まで一切揃はぬものはなく、庭坪にはあまたの家畜が跳ねまわつて居れば、菜園には花の咲いた、實のなつた草や木が澤山に植つて居る。

『本當にうれしい事だよ』、と女房が機嫌の好いのを見て、亭主もうれしく、己はもうこれで滿足、お前もこれからはもう苦情を云はず、おとなしくして居てくれ』と云ました。

さてその夜はいつになき樂しき晩餐を濟して、二人とも床に入りました。それから二週間ばかりたつて、女房は亭主に向つて。

『この家だつて多寡か瓦屋といふまでのよい、どうか今

少し大きい家が欲しい、私は一層お城の樣な、立派な大きい家に住みたいと思ひます、どうかお前さん、比目魚のところへも一度行て、賴んで來てお呉れな。』

亭主はもうこの家なら澤山だ、この上不足をいつては罰があたると、いろ〳〵すかしては見ましたが、なか〳〵聞かないので、また澁々と出て行きました、濱邊に行つて見ますと、海は今に颶風が起る兆候ではあるまいかと思はるゝ程、靜穩でありました。

漁師は先の樣に『比目魚どん比目魚どん』と呼びますと、オ、とも何とも云はずに比目魚は水の上に浮きました。

『おれの奥樣はまだあの家では滿足が出來ねえで、いつそお城に住みたひと云ふので、己らあ困つてしまう。』

『御心配なさるな、おかみさんのお願通りになつて居ますから。』

漁師はいそぎ歸つて見ると、丸屋はいつの間にか大きなお城となつて居ました。女房はいそ〳〵とお城の石階を下りて來て、『さアお這入り大變立派なお城が出來ました』と、亭主の手をとつて裏に引き入れる。亭主は女房の後について、自分の室にいつて見ますると、それは〳〵眩いばかりの壯麗しさ。壁の四面には金銀で緣とつた、額や鏡が掛けてあれば、室の眞中には黒檀の机と椅子とが礎てある、その机の上には、寶石を鏤めた茶器などが載つて居るので。『結搆ねえ』と女房も思はず云ひました。

『だからおらもう〳〵滿足して居る。お前もこれに云ひ分はあるめえ、この上苦情があつたら、それこそいよ〳〵罰を受けるに極まつて居る。』

『本當にそうですとも』

それより二三日が間は、事なく濟みましたが、ある朝女房はいつもより早く起きて、城の窓より城下を眺め

ますと、方々の國が只一目に見えますので、またもや慾心むら〳〵ときざし、いきなり亭主を叩き起しました。

『お前さんこれから王樣におなりよ。そうすれば、私は皇后樣だよ、うれしいね、さ、これから比目魚のところに往つて、直ぐに頼んでおいでなねえ』

寐耳に水の樣な、唐突な言葉に亭主は呆れて。

『なに王樣と、飛でもねえ、おれが何して王樣なんかになれるもんか、よしねえ〳〵、おれはこれでも過分だてえのに。』

『いゝよお前さんが王樣にならないでも、私ばかりは皇后樣になりたいから、さァ、さァ早く頼んで來てお呉れな』

女房に驅りたてられて、亭主はふたゝび不勝不精に出て行きました。

海には風が出たとみえて、沖の方に濤の音が濤々と聞えて居る。『比目魚どん〳〵』と呼びますと、『何の御用』と比目魚は出ました。『おれの奥樣は皇后陛下樣になりたいと云つてきかねえが、どうしたもの、』

『なに皇后樣になりたいと、』じや歸つて御覽なさい、おかみさん必常皇后樣になつて御前の歸るのを待て居るから。』

漁師は歸つて見ますとお城は宮殿と變り、御門の兩側には、二人の逞ましき赤帽兵が相竝んで護衛し、御門の中よりは、勇壯なる樂隊の音が瀏亮として聞えて居る。

門を通つて御殿の中にいつて見れば、女房はいつしか金の冠を戴き、錦の衣をつけて、皇后樣となつて居ました。

亭主は暫し女房の裝束をながめて。

望み通りに皇后樣になれたから、もう滿足したらう。』

『いや私はまだ皇后では飽足らない、女王にならなけ

れや滿足しないよ、さア往て頼んでおいで、』

『亭主も此度は決心して、おれはもう何と云つても往ねえから、お前往て來な。』

女房は怒りました。

『なに行かねえ：：私は皇后樣だよ、いくらお前さんが亭主だからつて、皇后樣の命令に背くとは出來まい、さア命令だよ、往つておいでな。』

へい〳〵今往くよ、怒つちやいけねえよ。

漁師はすご〳〵と出て行きました、海は深暗で、風は荒く、岩に砕くる濤の音が、物すごく聞えて居ます。

『比目魚どん〳〵』と呼べば、やがて比目魚はやつて來て、

『お神さんは此度はなに〻なりたいつて？』と問ねました。

亭主は怖々ながら、

『女王になりたいと云ふ、がどうしたらよからう比目魚どん。』と云ました、

『じや歸て御覧なさい、おかみさんはきつと女王になつてますから、』

亭主は歸つて見れば、女房は早や女皇となり濟し、諸士百官を召び集へて、天下の審判をして居ました。

もうこの上には、ならうと思つてもなりものがないから、定めし女房も滿足したであらうと思つて、亭主は心が落つけば、疲勞が來て、その夜はクッスリと寢こみました。

ところが女房はなか〳〵滿足しません、この上はなに〻なつたらよかろうと、夜の目も合せずに考へました、が、いくら考へても考へつきませんので、仕方がなく、高臺の上に登つてゆきました、をりから夜は名殘なく明けはなれて、東の空より盆の樣な太陽が出ました。

女房はこれを見て、ふと思ひ付き、『ア、私もあの太陽

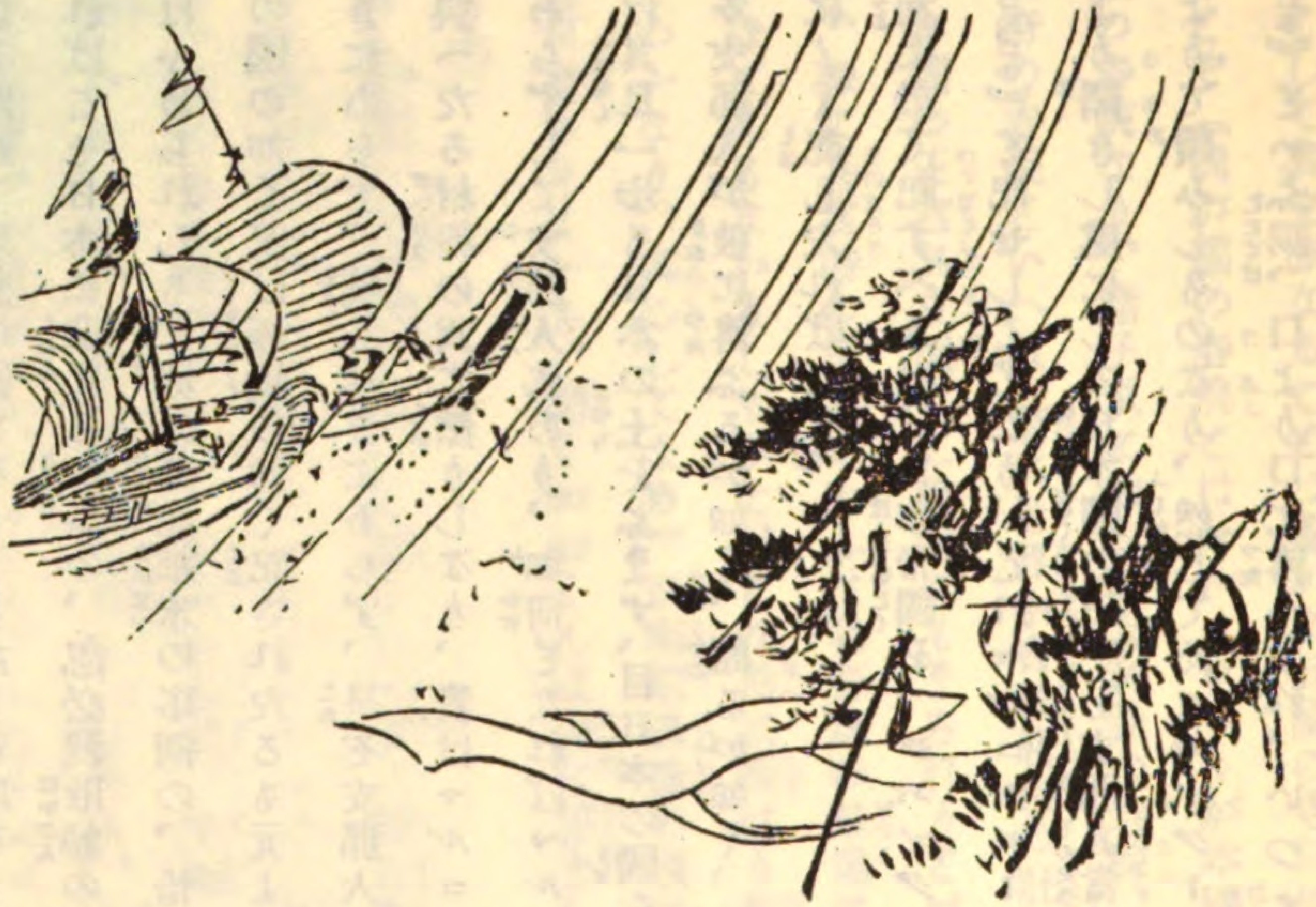
を動かす程の權力が有ちたいなあ』と叫びました。
そこでいきなり亭主を引ずり起して、
『サア起きねえかい、いつまで寐ているんだよ、私はこれから神になるから、そう頼んでおいてよ。』
あまりの言葉に、亭主は女房が怖ろしくなり、思はず手をついてあやまりました。
『もう勘辨しておくれ、おれはどうしても往けぬ、』と悲しげに云ひました。すると女房は鬼の様に怒つて、やにはに亭主を家の外に突き出しました。
亭主は泣く〳〵濱邊に往つてみますと、海は益々荒れに荒れ、獅子の様な激浪が縱横無盡に暴れまはつて、もの凄さ一通りではありません。
このすさまじき浪の中より、微かに比目魚の聲がきこえました。
『お前のお神さんきつと神になつて居る。』
亭主は歸つて見ました、すると今までの宮殿はいつの間にか消えうせて、みすぼらしき疎屋の中に、おかみさんは蝸牛の様につくぼんで居ました。

マルコポローが記せし日本

其之助

歐洲人にして、我が日本の事を筆にのぼせしもの、實にマルコポローを以て嚆矢となす。
マルコポローは以太利亞の商人にして、父ニコロポロー及び伯父マフエーポローにつれられ、クリミヤ、ボハラ、印度、シヤム、ビルマを經て、支那に來り、大に帝王の寵遇をうけ、久しく足を宮中にとゞめ、其左右に侍せしものなり、而して其日本帝國に關する記事は、皆支那に於て人傳てに聞き口碑に徴し、半かば己が想像を加へしものなれば、或は荒唐無稽の傾きあり、荒唐無稽のよしや傾きありとても、是歐洲人をして東洋に日本帝國ありてふ事を知らしめたるの基ひ、西洋

牙、はるとがるの商人をして續々航路を東にむけしめ



たるの導火線なり、即ち西洋と日本帝國とを結びつけたる最初第一の鐵鎖なり、たとひ事實に遠しとするも傳へずして可ならんや、語らずして可ならんや。

コロンバスが亞米利加を發見せし初めに當て、歐洲人が新世界について抱きたりし各種の忘想、米國開國の歷史に於て貴重なるが如く、マルコポローが日本帝國に對して記せし一種奇異なる記事こそは、實に日本帝國外交の史に於て貴重なり。

マルコポローの支那に來りしや恰かも元朝の中葉にして、かの忽必烈の世を去ること甚だ遠からず、從つて其日本に於ての敗衂、瀚海の鯨鯢そこの水屑となり了りたるの一事は依然萬人の記臆に存して全く其心頭より去り盡さず、相模太郎が名を初めとして倭人の勇氣當るべからずとの思ひは、各種の事を聯想せしめて、所謂針小棒大、古人の書きし粟散邊土の日本は一躍して神の國、鬼の國とたゝへられ、恐れられ、全く現實

の域を離れて理想の國となり了りたりし時なりけり。

さればこそ日本に關する記事の、忽必烈敗衂の事を以てはゞめられしも、亦は其他細末の事柄の、恰も海龍王の國の如く又は極樂の如く記されたるも元より怪むべきにあらず、笑ふべきにあらず、是ぞ支那人が彼れに與へたる材料の爲に然りしなり、責はマルコポローにあらずして支那人にあり、如何となればマルコポローは其足一歩も日本の土をふまず、目日本の國を見ず、唯々支那人が彼に傳ふるが如く、語るが如く、聞くがまに〱記したればなり。

最初に於て記すべきは、日本帝國を、ジパングー《Zipangue》と記せしことなり、これマルコポローが支那人より聞きし處にして日本國の三字を支那其當時の音によりて讀みしものなり、然して此ジパングー《Zipangue》といふ詞、口より口に傳へられ、いつとなく遂にヂヤツパン《Jaipan》と變し了し、つゞきつゝいて今日に至れり。

マルコポローはジパングー《Zipangue》と記したり、之を譯するに當り日本國と直さんことは誠に由なし、故に原文のまゝジパングー《Zipangue》の名を用ふ、咎めたまふな、笑ひたまふな、是れ余が創作の文にあらず、マルコポローが文を紹介するなるが故なり。

前置のことはり徒らに長く、或は諸子の意を損せり、願くは一片の雅量を以てそを許し、次きに記する處を讀め、これより愈々本文なり。

マンギー《Mangi滿州》の海岸を東に去ること殆んど一千五百里の海上に大ひなる島國あり、ジパングーといふ、住民は白皙の人種にして品行正しく、偶像教の信者なり、上に賢明の聖主ありて萬衆いづれも是に伏す、國法を以て商人の外に出るを禁ぜしかば、自づから輸出の途塞がり、金銀國内にのみとゞまりて其量甚だ多し、かつて彼地に渡りし者の說によれば、其王宮の如

き屋根も窓も又床も皆黄金を以てこれを飾り、莊嚴赫々として其立派なることは遙かに我國の寺院にまされりとぞ《我が國の寺院とはマルコポローが本國伊太利亞の寺院なり、諸子夙に知る伊太利亞の寺院、就中羅馬府の寺院といへば、實に世界中有數屈指の壯觀なり、日本國の王宮其立派さこれ等にもまされりとはそれ如何、殊に其當時の王宮といふは北條氏の跋扈によりてさほどにもなかりしものを、これ前に斷はり置きしことの一なり、其心してよめ》又珊瑚眞珠の類にさへ、甚だ富めりといふ、聞くが如くんば誠に羨ましき富國なり。

斯る富國の風潮海を越へて達せしかば、野心燃ゆるが如き忽必烈は、アパッカ、ベンザンシンの二將軍に命じ、山の如き艨艟數十艘に充分の兵員、器械、食料を備へ、ヂパシグー征服の途に昇らしめたり、命のまゝに二將軍、一はザイツームより、一はクインセーより發程し、日ならず彼の地に到達せり、されども軍略充分に合期せずして、利勝おもふがまゝならず、僅に一の市街のみを占領せり、占領の市街に住するものは男女老少の別なく盡くこれを殺戮せり、唯其うちの八人のみ、身に纏へる甲冑の固くして利刄其功なかりしかば、太き棍棒を以て打ち殺せり。

此勢に乘じいよ／＼進んで內地にまでも入らんずものと、心かまへてありしものを、おもひきや、北方の颶風夜に乘じて襲ひ來り、見る／＼內に艨艟の或物を沈め、或物は海上遙かに吹まくられて行衛も知らず、僅かに一二艘ばかり恙なきを得て、至極少數の人と共に其本國に歸るを得たり。

艦隊斯の如く破損せしかば乘込の人々更に上下の差別もなく、各々底の藻屑となりたりしはいふまでもなきことゞもなり、されども又流れゆく木片に取りつき、或は日頃たしなめる游泳の術によりて辛き命を助か

り、ジパングーの本土より凡そ四五里隔たりたる、或さゝやかなる島に泳きつきたりける者も又中々に少なからず、やがて三萬人ばかりもありしとぞ、元より食料の貯へ、武器の用意とてもなく、たとへば猿か山羊かのごとくに、岩より出つる清水をのみ、野生の菓などを喫して、僅に一二日を送りたり。

堂々たるジパングーの軍艦は、吹く風に種々の旗を張りあげ、君命うけて沂ましく、彼等を捕へんがために來れり、唯さへも恐れにおそれたる一同のものどもは、急ぎにいそぎて島の中央なる高き山の彼方に隠れつくしたり。

逃げかくるとも逃すべきにあらずとて乘込の人々、我こそ先にと數を盡し、一人殘らず上陸し、勢揃えて追つかけたり、追はるゝにつれて愈々のがれ、遂には彼我其處を異にして追はるゝ者こそ捕へんと來りし人の上陸なせし所に來れり、とみれば一人の水夫だもなき軍艦のかなたにあることそ誠に天の與へなりと、濱邊に乘りすてたる小舟によりて彼處に漕ぎつけ、一同それに乘込んで、逃れゆくこと兩三日、或繁華なる港に達し、玆に再たび上陸して我物顔に振舞ひたりけり。

ジパングーの大王は、これにいたくも逆鱗ましく〳〵、兵力を盡してせめよせたり、合圍玆に六ヶ月、遂に殘らず出てゝ降る、惠ある國王は深くも彼等の罪を咎めず、降を入れて助命せり。

國威を損せし敗軍の將を助けざる、忽必烈の軍法によりて、逃れ歸れる二將の内、一人は斬に處せられ、他の一人はゼルガとて程遠き島に流されたり。

是實に紀元一千二百六十四年春の事なり。

マルコポローの旅行記中、日本帝國、彼れのいはゆるジパングーに關する記事は僅かにそれのみ、聞くまゝを記せしことゝて、旅行記に於て大切なる風俗人情などの事を記さず、唯一片の御伽ばなしともいふべき事

を記したるぞ可咲しけれ、一見何の價値もなき樣なれども、決して然らず、是ぞまことに初にもいひし貴重の記事なり、日本開國史の第一ページに記すべき事なり。

群書解題

欲　東

人もし旅に出でんと欲せば、まづ其目的の地に至るべき道の順序を知らざるべからず、何處には如何なる山あり、何處には如何なる川ありなどいふ、一わたりの事をだに知らずして、たとへば盲目の人の物をさぐるが如く、何のあてどもなく、又考もなく、唯々足のむかふがまゝに、歩みたりとて決して功はあらざるなり、あさり行く内に神疲れ躰倦みて、中途に倒れなんこと疑もなき事柄なるべし、これに等しく、讀書せんにも前以て此書には如何なる事あり、彼の書にはかゝる事ありてふ、荒ましの筋だけ位は、必ずとも知らざるべからず、そを少しだも知らざる時は、たとひ百萬の書籍前にありとも、如何なるものより始めんかと、途方に暮れて終るべし、古より此道の先輩といはるゝ人々、樣々の書を著はして、群書の題を解したること、全く是が爲なるべし、其注意こそ到れり盡せり、玆に是等の類にならひ、思ひあたれる書どもの、題を解してかゝる便利を與へんと企たつ、もしこれによりて讀者諸子、余が期する處の十分をたも得ることあれば、本意此上もあるべからず。

其一　竹取物語

竹取物語は我國に於ける物語の尤も古きものにして、其作者さへもさだかならず、されども大抵は源の順と

いへる人の作なりといふの說にかたむけり、全躰の仕組は鳳樓閣經といふ御經文の中より出てたるものにして、いはゞ今日の飜案物と同じ事なり、さて其筋はいかんといふに、

昔し或ところに、讃岐の、みやつこ麿といふ翁ありて、毎日々々山に行き、竹を取り來り、そを賣りて身のたつきとせり、或日また例の如くに伐り取りたる多くの竹の中に、根もとより光をはなつ竹の一本ありければ、不思儀におもひてよく〳〵見るに、其光れる處にこそ豆粒程なるいとも美しき女居たり、翁かごにいれて持かへり、嫗にも見せてともに喜び、夫婦してそを育てけり、翁此小さき女を得來りしより、家ます〳〵榮へ、身も又すこやかになりまされり、日ならずして女大きくなりければいたくも喜び、三室戸齋部秋田といふ人を呼び、命名の事をたのみしに、秋田はなよ竹のかぐや姫と名づけたり、やがていろ〳〵の祝もすぎ、去年と去り今年とむかへ行く內に、かくや姫はいよ〳〵ます〳〵美しくなり行きけり、されば近きあたりの浮れ男ども、我こそ先きに後れじと、各々おもふ心を通はせけれども、姫は更にうけひくべうもあらざりけり、人々はうんじ果てゝ、大抵思ひとゞまりしも、石作の皇子、車持の皇子、右大臣安部御主人、大納言大伴御行、中納言石上麿などいふ五人ばかりは、更に思ひたつべうもなく、夜ごと日ごとに通ひたりけり、翁姫にうちむかひ、是等の人々が、かくまでに心をなやましたまふなるを、何とてかくもつれなきぞや、五人の內いづれにてもよし、擇んでその人に見みへ、かつうは身をも定め、かつうは我等にも安心なさしめたまへといふ、姫は答へてさればなり、今更にさていづれともいふべきならず、願くは五人ともに、我いふ品を得さしめたまへ、其品を見たる上にては兎も角もすべしといふ、翁此由を五人につげしに、そはいとも〳〵易き事

なり、何なりとも姫が心に叶はんもの必ず求め來るべし、さて姫は如何なるものを望みたまふと翁してそを聞かしめしに、思ひきや姫のほしゝといふものは、世にも得がたき品ばかりなり、まづ石作の皇子には天竺なる佛の前にある石の鉢を、車持の皇子には東海なる蓬萊の島に生える玉の木の一枝を、阿部の御大人には唐土にある火鼠の裘を、大伴御行には龍の首にある五色の玉を、石上の麿には燕のもてる子安貝を各得させたまへといふ、いづれもなみ〳〵の物にあらず、世の常の人々なれば聞くがまゝにひるむべきを、如何にもして此姫を得んぞと思ふ此等の五人は斯る難題にあふて更に驚く色もなく、おのがまゝ思ひ〳〵の手だてを廻らし、或は僞りよそほひ、又はたはけの限りをつくし各其品々を持て來しも、皆眞實のものにあらねば、忽ちにして見現はされ、五人の苦心は水の泡とぞなり果てけり、かくて姫はたれに見えず、其儘にして

日を送りしが、遂には其頃の帝の御目にとまり、如何にもして宮に入るべき樣勅使再三に及ぶといへども、姫は應せず、強いてといへば姿を消しかくして見えずなりけり、されば帝の御力にても如何にも志がたく、其まゝにしてありしを、其秋の最中のころ、姫をむかひの人々月の世界より下り來り、つれて天上に歸らんとす、翁をはじめ多くの人々、あらん限りの力を盡すも止むる能はず、姫は遂に天上に歸り上れり、もと此姫といふは月の世界の人なりしに、罪を得て、暫し下界に下されたりしが其罪此秋に於てゆるされしなり、其天に歸る時後のかたみにとて、かつてより身にまとひたりし衣と、むかひの人々の月の世界より持來りし不死の仙藥をたゝへし壺とを、殘せしを、翁は仇なる片見あつて思ひの種なりとて富士の頂きに持ちゆきてこを燒き捨てたり、其烟いまに絶えずしてかの山の頂きのこれり（竹取物語の出來し時分ふじ山は噴火山な

りし故にかくはいへり』然して又其時不死の藥をも共にやきすてしが故にさてこそかの山を不死の山とはいふなりと玆に全躰の話をむすべり。

人の僻性

江戸白銀の里の人馬肝菖蒲皮を愛し其色其形總て衣服器具に及ぶ

丹後 人外山成山といふもの常に桃を愛す幼名は桃太郎器具衣服皆桃花桃實の色形を用ゆ家居四面悉く桃樹を植ゑ夏秋は日に數升求め食す一市爲に盡く藥舖に桃仁を求むる百數十石自ら號して桃花庵蓁々居士又賁堂仙源といふ俳優宗十郎が桃井若狹之介の伎を見て之を家に招きて饗し又或時京都桃山の勝を聞き即時に發程する等奇行多し

元祿中京師の人松本勘十郎といふ人古畫鑒定に妙を得たり常に間道色を愛し身邊の諸物間道色ならざるは無し人呼んで島勘十郎といふ

和泉國境浦の人河内屋吉兵衛紅色を愛し性來火事を好む自家火災に逢ふも覗さして意に介せず文政年間の奇人なり

飾屋吉兵衛は浪花の人なり人呼んで帶吉といふ只帶を好み集めて品數觸に多し交〻之を代へしめて自ら喜ぶ一日七八回衣は只一領にすぎず安政年間の人二右衛門坊の長をつとむ人或は帶商人と過つもの有りけるといふ

大島屋彦兵衛備中倉敷の人家豪農にして大に富む僻大に屛風を好み倉庫數十皆屛風を以て滿つ大小幾基あるを知らず中に純金高三寸の屛風ありと并に安政年間の奇人なり夫れ此等大平の餘澤弱者の致す所か。

家政

物品の置處

恕哉

家庭の整理上最も缺ぐべからざるものは、一家の秩序なり、尙ほ卑近に言へば、假令ば家庭に於て、物品の置き處を一定することとなり、日用品の置き場處の一定せぬことは、其必要の場合に接する毎に、不都合少からずして、無駄骨を折ること多きものなり、又た他に大なる害を及ぼすこと少なからず、予の知人某、嘗て集會條例に觸れて獄屋に呻吟せしものに監囚内の話を

聞きしことあり、某が同監中に放火未遂兼兇器携帯脅喝の罪を犯せるものあり、この犯人の實話に曰く「予は固より糊口に窮するもの故、明日の食粮を得るの目的にて或家に竊入せんとしたり、其時は未だ小膽にして、唯脱ぎ捨てある衣類位を盗めば足る位の考なりし所、目指す或家の外門を越えて、臺所口に廻はり、上方の窓を破りて竊かに入らんと手を懸けし所、計らず窓の上に「マッチ」のあるを發見したり、依りて何氣なく之を懐にし、窓の格子の堅き爲め容易に這入ることの叶はぬを以て、更に座敷の椽前に趣きしが、不思儀なるかな、此所には一箇の「ナイフ」落ち居たるを發見せり、又た何氣なく之を拾ひ、種々考慮するに、侵入すべき所もあらざりしかば、如何にせばやと、悪心勃々たりし際、ふと懐の「マッチ」と「ナイフ」の事に氣付き、一段に悪心を増長して、先づ「ナイフ」を以て板戸を破り、侵入して家族の前に「ナイフ」を閃めかし、金を出さゞれば殺害に及ぶなど、威赫をきめ、あらゆる家中の金銀貨物を出ださしめ、其儘に逃ぐるもと思ひ、先の「マッチ」を用ゐて放火して去れり」と、此事たる聞くも身の毛の竦つを覺ゆるなり、熟ら思ふに犯人もと悪漢には相違なきも、其自白の如く初めより斯く迄の大膽なる處置に出づる考はなきものゝ如し、唯だ其家より得たる「マッチ」及び「ナイフ」は、大に悪心を煽動したるものゝ如し、此例は家庭の整理、自用品の置き場處を定むる事とは關係少なきが如しと雖、矢張り或は「マッチ」を亂雜に窓の上に置き、「ナイフ」を椽先に放擲し置きたるの罪と言はざるを得ず、予は此話を聞きて、犯人等の心情を憫むと同時に、家庭の上に大に警戒を加ふるの必要を感ぜり、日用品の置き場所の一定せずして、必要の場合に接する毎に、無駄骨を折り、無駄の時間を費すが如きはまだしも、其物品を悪用されて、遂には毒刄に罹り、且つ放火さるゝ

の不幸に逢ふが如きに至りては、殆んど沙汰の限りなり、然しこれ實に家庭の上に最も注意を要すべき點にして一方には家道具の置き塲處を一定して、平素亂雜ならざる樣にすると同時に、一方には其品物によりては、置き塲處をも能く選擇して適當の塲處に置くべきことなり

可愛らしき日誌

しをに

日誌は大抵家事を主宰むる人々の、毎日登記して、後日の備忘參考等に供ふるものなれど、之を爲すものは、多くは世事に出遇ふ折り、必要を感じて始めて作り設くるものなれば、筆執る人の年齡は、大方二十歲前後なり、又縱令一家を理むるものにあらずして、自己一身の事を誌すとするも、矢張り二十歲近くの人なれば、是より年若きものにありては、教師父兄或は他人の話などを聞きて、日誌を書かんと思ひ立ち、半紙又は手帳などを、父母に請ひ、其當坐二三日は、書き付くるとあるも、何時しか、倦みて忘却し、數日を經る程に、はや此月は殘り少なし、いで來月より、更に筆を染むべしなどいへど、其月になれば、又も打ち過して、竟に取り留むる所なし。

斯れば、日誌を書き付くると、甚だ面倒の樣なれど、決して面倒なるにあらず、寧ろ其人の無精といはざるべからず、何事も習慣になれば、日誌を書き付くる事の習慣を養ひたらんには、左まで面倒にもあらざるべし、故に少年の學校にある頃より、此の如き習慣を養ひ置くと、最も必要にして、先づ日用文を綴り得る頃を手始めとし、文脉並に書き付くる事柄等は、一に少年の學力に應じて、精粗あらしむ。

左すれば、第一作文の練習ともなり、架空なる課題に頭を勞せんより、遙に實收を得る事、第二自己の小遣

史……家庭の小歴史たるを得る事、第三物事に注意深き習慣を作る事、第四一事を、長く繼續する習慣を得る事、等其他種々の利益あるべし。

次に揭ぐる日誌の一節は、下野國足利尋常小學西校第四年生、茂木まんなる一小女の、手に成りしものにて、如何にも眞率直截のものなれば、其内一日より十日迄の一節を、拔記して、聊か參考に供す。

八月一日　朝は、ながしをかたづけ、さうじをしました、讀本は七のはじめから、十五枚さらひました、あとはもりをしました、

八月二日　あさごぜんをたべてから、作文をはじめからしまひまでよみ、讀本は十五枚より、四十枚までよみ、あとはかみをあらひました、

八月三日　あさ、はたはぬひ(機端縫)をし、それからは、すこしづゝ用をしました、

八月四日　あさ、かざり(織物の飾)をこしらへ、ひるからもまたこしらへ、くかひと、もりをしまた、讀本は、二日共によむことはできませんかつた、

八月五日　朝、かざりを、ひるをたべて、なべとはちをあらひ、そのつぎは、すこしあそび、修身は一課より十一課よみました、

八月六日　かざりをこしらへ、はたはぬいをし、ひるをたべて、かみをゆひました、

八月七日　朝、ざしきをはき、ざうきんがけをし、かざりをこしらへ、ゆをあび、ごぜんをたべ、よなべをしまだ(尙)する人に、か(蚊)を、をつてあげました、

八月八日　あさ、さうじをして、きんかざりをこしらへ、かはら(河原)へ、反物もつてゆき、ふのりをかつてき、ひるをたべ、ながしもとをし、ばんがた、米をとぎ、鍋をあらひまし

た、

八月九日　朝、なすの皮むきて、きんかざりと、きぬかざりとをこしらへ、鍋と釜とをはちとをあらひ、すこしやすみ、かみをとかしました、日しよくがありました、

八月十日　あさ、ぶんこをおり、友だちに、あねさんをこしらへてあげ、ごぜんをたべてやすみ、ゆふがたから、つかひし、讀本と修身の表紙をつゝみました、

甘藷料理

今や甘藷の出盛にて又旨味の乘つた盛なり、甘藷の料理にもいろ〳〵あれど、其内餘り手數のかゝらぬちよと珍らしきものを記す。

(一)鳥もどき　甘藷の皮を剝き生のまゝにて擦し、之に蜀黍粉を混ぜて固め、竹篦に五分乃至七分位の厚につけ、これを適宜にきり胡麻油にて煠るなり、榧實の皮仁ともにたゝき混ぜ、丁度小鳥の肉のたゝきほどにとりて麻子二三粒を入れ油にて煠る料理を小鳥もどきといふ、一寸變つて面白し。

(二)衣かけ　これは單純なる仕方にて生にて三四分に切り、別に醬油と味淋にて加味したる小素粉液にまぶし胡麻油にて煠るは普通の精進揚なるが、生にて擦し之を蒸して取り、別に小素粉に少しく青粉を混へ、醬油、味淋にて加味したるものを衣とし、之に右の蒸たる擦甘藷を煠ぐれば美しき精進揚となる。

(三)鶉やき　これも生にて擦し小素粉少し入れて捜ねまぜ、また、小豆の餡をも加へ、饅頭のやうに形をとり米の粉をまぶし焙目をつけて出すなり。

(四)時雨やき　矢張生にて卸し蒸して蛤の肉の形につくり、蛤の殼の内へ入れ、醬液をさして貝共に燒いて食すべし。

(五)雁もどき　生にて擦し之に豆腐少々加へて能く擂り、銀杏、木耳、麻子、切昆布等の混雜たるものを、おろし箸にて包み胡麻油にて煠げるなり。

(六)千鳥みそ　蒸甘藷百目、白味噌五十目、砂糖十匁、乾山椒粉五匁の割合にて右四品をひとつに擂りまぜ、水嚢にてこし鍋にて煮れば千鳥みそと稱するもの容易に製せらる。

(七)田樂　生にておろし、成るべく薄板の箱に詰め、蒸籠にかけ箱ともに蒸し上げ、之を適宜に切りて串にさし味噌をつけて燒くこと豆腐の田樂の如くす。

(八)狸汁　生にて擦しつまみとりて胡麻油にてあげ、さゝかき午蒡を入れて味噌汁にたてるなり。

(九)かばやき　生にて擦し凡三分程にも延し、蒸し上ぐるや直ちに淺草海苔の上に並べ、能くひつつきたるを見て適宜に切り、胡麻油少許其上にひき、山椒醤油にて附燒にするなり。

(十)羊羹　藷精一合（藷精を製するには生にて擦し、水に浸して水嚢にてこし其水を陶底にしづみたる精を取ること葛根より葛を製すると同じ）赤小豆粉一合五勺、砂糖蜜三合を混和し水嚢にて漉し銅鍋にて煉り固め、重箱に移し冷して食用とす、白羊羹を製する場合には白小豆粉を用ゆるまでなり。

此外色をつけ或は道具を用ゐて料理するものいろ〳〵あれど、素人の家にて一寸むづかしきもの多ければ省きぬ。

當節の膳部

〔汁〕　小芋輪切に菜。　銀杏大根に菠薐草。　おこと汁（芋を四半に切り、大根をいてうに切り、人參を輪切、燒豆腐を角切にし、赤小豆を入れてごつた煮にす、これは女子が正月裁縫の仕始と十二月裁縫の仕納の日に製する習慣料理）。　蠣と木耳。　鯛と粒椎茸。

白肉鯨の薄切と葱白根。　あられ豆腐にこま〳〵菜に納豆（納豆は汁へ摺りこみ菜は盛る前に放してざつと煮る）。燒小鮒に燒豆腐の大賽の目、千山椒。（へぎ赤貝に小芋輪切、芹等。

〔刺身〕　小口切海鼠に紅葉おろし二はい酢（紅葉おろしとは番椒を細々に刻みて大根おろし交ぜたるもの）。鮭の平つくりにさばき鰕、山葵いり酒。　肉さき燕鳥、胡椒、玉子酢。　比目魚平つくり、短冊うど、黒くらげの鼓膾。　剝蛤に大根切千の胡麻鼓膾等。

〔吸物〕　金海鼠の薄切、もやし獨活。　結び鱚、淺草苔のもみ。　鴨の薄切、松露に短冊大根。　鯛の骨附切に細切蕗の薹。　鰕くづしに松茸、三つ葉等。

〔煮物〕　魛亂切のすつぽん煮。　鯛しほやき。　鰣の味淋燒。　金絲魚の魚田に燕長芋。　鯛の味噌漬燒に唐煮の蜜柑。　鮭のてり燒、ざせい豆腐。　鯰の鹽やき等。

〔浸物〕　小松菜に胡桃のこま〳〵生醬油。　小松菜亂切、芥子醬油。　菠薐草に芥子ふりかけ、薄醬油等。

社交一斑

流行の栞

流行子

流行の洋服

本年冬の洋服の流行は、形に於て今春と大差なし、即ち胸明廣く丈長くヅボン太く概して仕立の緩なるを好む、次に各種につきて流行の如何を記す。

エブニング、コート　即ち燕尾服は黒無地の中肉羅紗の上等表にフランス絹の裏をつけて裁縫を十分にしたるもの（價四十圓前後）矢張黒無地羅紗に綾絹の裏をつけしもの（三十三圓前後）

フロックコート　は正式に好めば黒無地の羅紗にして裏は前記の絹を用ゐ、三揃に好みしもの（三十五圓前後）次に最も多く行はるゝものは黒の極細綾か、七子目の羅紗の裏に綾絹の裏をつけて三揃にするか、又はヅボンを黑地若しくは焦茶地綾羅紗の友色小中竪縞せしもの（三

十三圓前後）勿論是等の好みはわざと縁を取らぬことなり

モーニングコート　黒の一本綾羅紗の上衣に前記綾羅紗の友色小中竪縞を取合せしもの（廿八圓前後）次は濃紺の斜太綾羅紗の上衣に焦茶綾羅紗の大竪縞か、又は淡茶、淡鼠の中竪縞のヅボンを合せしもの（廿五圓前後）但し勿論縁なし。

サックコート　則ち脊廣の流行は左の如し

（第一）濃紺の玉ヘルの三揃の兩前形にして、袖裏を縞綾絹にして胴裏紺地か黒地の縞毛繻子を用ゆるもの最も多く人意に投す（價十八九圓）

（第二）紺の「メルトンの」上衣にズボンは「スゴッチ」の席織の如き地厚の竪縞、色氣は焦茶、媚茶、淡鼠、濃小豆等最も流行を極む、形は兩前仕立（價十七圓より二十七圓位）

（第三）三揃にして地合は縞のスコッチ又は縞羅紗とす、色は黒、媚茶、淡鼠、焦茶、濃鼠等の霜降か又は朧撚子を用ゆるもの、形は片前を好む（價十五圓前後）

オーヴァ、コート　（第一）エブニング及フロックコートの上に着すべきものには焦茶、媚茶、濃肉、利久等の地厚無地羅紗か、又は同じ色の中肉羅紗の表に裏を友色の絹をつけしもの二十圓前後（第二）同じき場合に着用すべき今一つの流行品は前記の色の薄地細綾の無地か又は霜降、裏は毛繻子（十四圓位）（第三）脊廣の上に着用するものは地厚スコッチの黒、焦茶、鼠の杢目、裏は毛繻子にして兩前形に仕立てしもの十四圓位なりと、長は膝下一寸さがりを好む。

ロング、コート　即ち防寒外套は白木屋が殊に巴里に注文して織り出し流行社會に新機軸を出せしものにして一見毛切天鵞絨の如き二分厚の駱駝毛羅紗なり色は紺と焦茶と媚茶との三種あり、此表に裏を地厚の大撚子縞セルを用ゐ、頭巾、帶付にして襟と襟かへしと袖頭に河獺をつけしものは無類なり（價六十五圓前後）次は黒、紺、茶の地厚玉羅紗の表に前記の裏か或は縞毛繻子を用ゐしもの但し河獺皮を用ゐず（二十五圓）

男子用外套及婦人用外套

男子用　形は帶付、襞付の好み六分、帶なし、襞なしと角袖四分の割合にて流行せり

（一）黒、紺、茶の席綾か、又は粢撚子の綾或は焦茶、花色、媚茶、淡利久、千歳等の撚子綾羅紗、裏は繻珍、又は綾絹をつけ、河獺皮の襟をつけしもの（四十五圓位）

（二）前記の色の縞羅紗か、又は淡鼠、焦茶、媚茶茶無地羅紗、甲斐絹

裏をつけて河獺皮なきもの（二十二四位）

（三）搭子綿スコツチの裏に毛繻子裏か用ゐしもの（十二四より十五

四）

婦人用　即ち現今專ら流行社會に持囃さるゝは吾妻コートなり、（一）鼠茶、媚茶、利久、花色、黑の大斜綾羅紗の裏に、繻珍又は綾絹の裏地をつけしもの染し第一流なるへし（二十三四位）（二）同じ色の稍こまかき斜綾羅紗の裏に、甲斐絹裏を用ゐしもの（十三四四）（三）おぼろ搭子の淡色縞羅紗の裏に、甲斐絹の裏をつけしもの（十六七四）但し吾妻コート出でしより交際社會に肩掛は全く廢れたりさいふやうな流行界の形勢なり

カラ、カフス、釦、襟飾、針

カラは幅の廣きかた、カフスは從來の如く丸味のものならで角になりたるもの、カフス釦は婦夫釦さ稱する小形のもの、襟飾は蝶形も一文字もはやらす、結び下になりたるもの流行するこさ從來の如し、襟飾に用ゆるピンはなきかたよろしけれど、すつさ上等ならば用ゆるかた流行す

實用護謨櫛

護謨を臺さし、之に種々の彫刻又は芝山※施し一見黑鼈甲さ見ゆる實用一天張の護謨櫛、京橋區南傳馬町大西白牡丹より出でたり、笄は張子製、一組五十錢より二圓内外

歌苑

、。夜荻　園部ちか子

よもすから荻の葉誘ふ秋風のなとか拂はぬ袖の上の露

、、、旅中述懷　同

草枕夕の露のかゝる世になすともなくきえむわひしき

、、朝顏　薩摩　木川まつ

葉隱れに咲き殘りたる朝顏やさためなき世の姿なる亂

評　下句うこきてわろし

。殘暑　同

村荻の音には秋の立ながら小舟さをさし涼む今日かな

評　はまなきは多く伊勢の海邊にいへりこゝにはゆかりなし

、、樵夫　同

なけきこる世の人ことに競ふれば朧山かつの業も尊とし

評　三句もさのまゝにては結句尊さからむさいふべきなり

、、、夏海邊　栃木　湧井藤七

沖つ風よせてはかへす浦つたひ夏こそなけれ波の白濱

（未完）

明治廿五年九月十四日遞信省認可

近松著作一斑附錄

巣林子戯曲

上卷 定價金拾八錢 郵稅金四錢 下卷仝上

近松門左衛門が戯曲の價値は今更説くまでもなし
此書は則ち彼が戯曲中珍本逸篇として世多く傳へざるものを擇び之を世に紹介せんと欲するに在りて其第一着に出されたるは
大磯虎稚物語。曾我扇八景。傾城島原蛙合戰。大職冠。二人靜胎內探。持統天皇歌軍法。
然して其下卷として七月五日發兌せられしは
浦島年代記。弘徽殿鵜羽産家。井筒業平河內通。蛾歌加留多。日本武尊吾妻鑑。用明天皇職人鑑。
是れ皆近松門左の作中世稀に傳ふるものなり
其如何に誦讀するに堪ゆべきやは讀者一本を繙て之を知て可也

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行